大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

＊特集

文系廃止？
――文科相通知騒動と国立大学改革のその後

本田由紀 1
文科相通知騒動とは何だったのか？

河野真太郎 8
文化の成長と育成 ――首都圏国立大学の状況から

寺脇 研 14
私立大学は無関係なのか？

足達 薫 20
「社会的要請の高い分野」とは何か ――地域志向型大学の現在と未来

＊連載

中垣信夫 26
命の形―形の命 No. 07

大学出版部ニュース 28

No. 106
2016.4
春

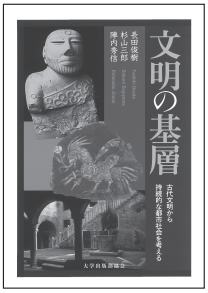
一般社団法人
大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2015年7月刊】

2014年5月に千代田区立日比谷図書文化館で開催された市民シンポジウム「文明の基層」(総合地球環境学研究所・京都大学学術出版会・大学出版部協会 主催／活字文化推進会議 後援)の内容をブックレット化しました。



長田俊樹　おさだとしき(総合地球環境学研究所名誉教授、神戸市外国語大学客員教授)
杉山三郎　すぎやまさぶろう(愛知県立大学大学院特任教授、アリゾナ州立大学人類学学部教授)
陣内秀信　じんないひでのぶ(法政大学デザイン工学部教授)

文明の基層

古代文明から持続的な都市社会を考える

A5 判・80 頁／定価（本体 1,200 円＋税）ISBN978-4-13-003152-3

古代都市のイメージは大きく変わりつつある。インダス文明の諸都市のゆるやかなネットワーク、中米の古代最大都市テオティワカンでの新しい発見。人はなぜ都市を作ってきたのか、その歴史的基層を中世ヨーロッパのヴェネツィアと比較しながら、改めて都市の魅力と未来への可能性を探る。大学出版部協会ブックレット第3弾。

〈主要目次〉

第一章　インダス文明：ネットワーク都市――中央集権的文明観を覆す（長田俊樹）
「大河文明」は本当か？―広大なインダス文明／インダス文字とインダス印章／草原の遺跡、海岸沿いの遺跡―大河から離れて／砂漠の遺跡の謎／「城塞」と「パスポート」―都市ネットワーク論に向けて／墓から見えるもの―格差の不在／砂丘が先か、文明が先か／インダス文明は大河文明ではなかった―農業と水害の視点／古代文明観を見直す―「穀物倉」と「アーリア人侵入説」／文明の衰退について考える／ゆるやかなネットワークの存在／都市社会をどう見るか―中央集権的文明観からの解放

第二章　新世界最大の古代都市テオティワカン：英知の集積としての都市（杉山三郎）
閉ざされた空間の多様性／文明の萌芽／認知能力＝知恵こそが、文明の基盤をなす／中規模都市ができ始める／完全計画都市、テオティワカン／多くの人を迎える巡礼地として／暦と数の体系／「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」の二元性／墓は語る／古代人の交流―物を集めるネットワーク／文明の確立から崩壊へ―伝わり、つながる文明の諸要素

第三章　水都ヴェネツィア：交易都市から文化都市へ（陣内秀信）
水と共生する町、ヴェネツィア／逆・中央集権的構造都市―複雑に交差する水と陸のネットワーク／都市を解読する／交易都市から文化都市へ／オリエント志向と柔軟性／分散的都市から統合的都市へ／なぜ都市に人が集まるか／城壁の無い町／都市モデル再考／川が結ぶネットワーク／水車の活用／考古学調査がヴェネツィアのイメージを変える／ヴェネツィアの食と産物のネットワーク／ラグーナは自然・環境・歴史の宝庫―文化都市から環境都市へ

特集＊文系廃止？――文科相通知騒動と国立大学改革のその後

文科相通知騒動とは何だったのか？

本田由紀（東京大学大学院教育学研究科教授）

1　はじめに――「炎上」の社会的文脈

二〇一五年の六月から一〇月頃までの間、「国立大学文系学部廃止・縮小」に関する文部科学相通知をめぐる議論が、マスメディアや学術界、政財界など広い範囲を巻き込んで吹き荒れた。今年二月に刊行された吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社新書）は、大学や人文社会系の学問が置かれている現状を広く見渡した好著だが、その冒頭でこの問題が「炎上」するに至った経緯についてもまとめられている。それによれば、六月八日にこの通知が出されたのち、多くの全国紙が「文系学部廃止」を強調する形の記事を掲載した。通知直後の六月一六日に文部科学大臣が国立大学の入学式・卒業式における国旗掲揚・国歌斉唱を要請したことも、「大学自治の侵害」という大きな括りでこの問題が語られるようになる傾向に拍車をかけた。そして七月から九月にかけては、日本学術会議や海外のメディア、経団連などがそれぞれ、文科省に対して批判的な立場からの声明やコメントを相次いで示し、文科省側が弁明せざるをえなくなる事態となった。

ちょうどこの時期は、国会で「安全保障関連法案」の審議が行われており、法案成立に反対する集会やデモが、全国で著しい盛り上がりを見せていた時期と重なっていた。六月四日には、衆議院の憲法調査会に招かれた三人の憲法学者が、いずれも同法案を違憲であるとしたことが大きな話題となり、法案反対派が勢いを増す契機ともなっていた。六月一一日からは「安全保障関連法に反対する学者の会」がホームページを立ち上げ、署名を募った。こうした状況下での文科省通知は、安全保障関連法案に反対する学者たち――その中には人文社会系の学者が多数含まれていた――への弾圧とも解釈されて、いっそう問題化されていっ

た側面もあったと考えられる。

こうして昨年のことを書き記していると、あの頃の社会全体を覆っていた興奮や緊張を、筆者自身もひしひしと感じていたことが思い起こされる。しかし、それから一年足らずを経た現在、もう一度冷静に、この通知やその背景、大学側に望まれる対応などを考え直してみる必要があるだろう。上記の吉見の新書（『衝撃』と略記する）も踏まえながら、以下では筆者の見方を提示してみたい。

2　通知までの経緯

まず今回の問題化の発端となった、二〇一五年六月八日の文科相通知の当該部分を、改めて確認しておこう。これは、各国立大学法人の第二期中期目標期間終了時に行う組織および業務全般の見直しと、第三期中期目標・中期計画の方向性に関する通知として、国立大学法人に対して出されたものである。この中で論議を呼んだのは、以下の傍点の箇所である。「特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、一八歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学等としての役割を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むように努めることとする」。ここまで分野を特定した形で文科相が国立大学に対して組織の廃止・転換を求めたことは初めてであったことから、この通知が踏み込んだ性格のものであったことは確かである。

しかし、『衝撃』の中でも触れられている通り、この内容はすでに二〇一四年八月四日の国立大学法人評価委員会（第四八回）において「「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点」について（案）」として検討されており、同年九月九日には「（案）」がとれた形で文部科学省高等教育局から各国立大学法人中期目標・中期計画担当理事に通知されていた。

より遡れば、二〇一三年六月二〇日に提示された「今後の国立大学の機能強化に向けての考え方」という文部科学省名の文書には、教員養成系大学・学部に限定した形ではあるが、「組織編成の抜本的見直し・強化（小学校教員養成課程や教職大学院への重点化、いわゆる「新課程」の廃止等）」という文言がすでにある。

さらにその前後の状況に視野を広げると、二〇一二年六月に文部科学省が発表した「大学改革実行プラン」、二〇一三年五月教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」、二〇一三年六月に閣議決定された「日本再興戦略」および「第二期教育振興基本計画」、二〇一三年一一月に文部科学省が発表した「国立大学改革プラン」および各国立大学の「ミッションの再定義」といった形で、大学全般、中でも国立大学の競争力強化に向けての動きが、特に二〇一二年末に民主党から自由民主党へと政権が移行して以降、急ピッチで生じていたのである。

こうしたプロセスを踏まえるならば、二〇一五年六月八日の文科相通知への地ならしは着実に進んでいたのであり、国立大学法人にとっては特に今さら大きな「衝撃」となるものではなかった。むしろ国立大学にとっては、二〇〇四年度に法人化されて以降の毎年、運営費交付金が一％ずつ減らされ、再編統合もなされる中で、締め付けの強化は長きにわたる「打撃」として受け止められていたのである。今回の通知はその延長線上にあり、改革の要請が一段と焦点化されたものとして位置付けられる。

3　通知後の経緯

しかし、この文科相通知が、前述のような社会情勢の中でマスメディアに主導されて「炎上」したことは、一定の「反撃」を呼び起こす結果になった。日本学術会議が二〇一五年七月二三日に発表した幹事会声明「これからの大学のあり方――特に教員養成・人文社会科学系のあり方――に関する議論に寄せて」は、最も主要で公式的と言える「反撃」である。この声明は、「人文・社会科学のみをことさらに取り出して「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」を求めることには大きな疑問がある」としつつも、「人文・社会科学に従事する大学教員は、変化が著しい現代社会の中で人文・社会科学系の学部がどのような人材を養成しようとしているのか、学術全体に対して人文・社会科学分野の学問がどのような役割を果たしうるのかについて、これまで社会に対して十分に説明してこなかったという面があることも否定できない」とも述べており、人文・社会科学の側にも反省・改善すべき点があることを認めてバランスをとる内容となっていた。

この声明に対して、文部科学大臣補佐官の鈴木寛氏が、八月一七日のダイアモンド・オンライン上での署名記事「大学に文系は要らない」は本当か？　下村大臣通達に対する誤解を解く（上）（下）」において、「失望を禁じ得ません」、「今回の日本学術会議は、人文・社会科学の専門家としてのいくつかの基本を欠いた対応と言わざるを得ないからです」といった強い表現で批判し、「文科省は人文社会系を軽視したことはない」、「廃止」とは教員養成系学部の「新課程」（いわゆる「ゼロ免課程」）のことを意味していた、という論を展開した。しかしこの記事は、通知の文章における「廃止」が「新課程」のことを意味しているようにはとても読めない、という反発を逆に呼び起こした。

次いで九月九日には、日本経団連が「即戦力を求める産業界の意向を受けたものであるとの見方があるが、産業界の求める人材像はその対極にある」という見解を表明し、文科省に対して援護ではなく批判の姿勢を示した。

その直後の九月一一日には、下村文科相（当時）が会見において「誤解を与える表現だった」ことを認め、「人文社会科学系は廃止ではなく、見直しが必要ではないかというのが通知の本来の趣旨だった」と述べ、「廃止」対象は

教員養成系だと改めて説明した。

そして九月一八日には、日本学術会議幹事会で文科省側が説明する場が設けられ、その際の資料「新時代を見据えた国立大学改革」では、「文部科学省は、人文社会科学系などの特定の学問分野を軽視したり、すぐに役立つ実学のみを重視していたりはしない」、「「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」とは、例えば、いわゆる「新課程」を廃止するとともに、その学内資源を活用して、学生が生涯にわたって社会で活躍するために必要となる能力を身に付けることのできる教育を行う新たな教育組織を設置すること等を想定している」と、鈴木寛氏および下村文科相の説明を受け継ぐ見解が公式に示されている。

一〇月九日には、第三次安倍改造内閣において新しく文科相に就任した馳浩氏が、会見において通知に対し「あの文章では三二点ぐらいしかあげられない」としながらも、「内容は撤回しない」ことを表明した。ここまでの文科省側の対応は、「廃止」が人文社会科学ではなく教員養成学部を意味していたという弁明で一貫している。

しかし同じ一〇月九日には、「国立大学法人一七大学人文系学部長会議共同声明」が発表され、その中では「人文社会科学系学部・大学院のみをことさら対象にし、「ミッションの再定義」に応えようとしている国立大学法人に対して「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」を迫ることには大きな疑問を抱かざるを得ない。（中略）国立大学法人一七大学人文系学部長会議として強く抗議する」とされており、文科省側の弁明では十分な「火消し」とはなっていなかったことを物語っている。

実際に、一〇月二〇日に文部科学省が公開した各国立大学の第三期中期目標・中期計画素案の中では、三三大学が人文社会科学系学部・大学院の組織見直しを計画しており、教員養成系学部の「新課程」の廃止や募集停止を計画している大学は九校に留まる（一〇月二一日付リセマム記事）。すなわち、今回の通知をめぐる攻防の陰で、通知にもともと記されていた「廃止・転換」は、国立大学間で粛々と進められてきたと言ってよい。

なお日本学術会議幹事会は、一〇月一五日に「人文・社会科学系のあり方に関する声明への賛同・支援への謝意と大学改革のための国民的合意形成に向けての提案」とする声明を再び提出し、広く「大学のあり方」を産業界や一般市民と議論し合意を形成する場を設けてゆくことを宣言している。しかし、こうした方向性はむしろ、論点や対策を拡散させる方向に作用するおそれもある。

4　国立大学への圧力の社会的背景

以上では、今回の通知前後の経緯を概観してきた。全体として、文科省が釈明することで「炎上」はほぼ終息したものの、通知の内容は撤回されることも大きく修正されることもない形で実施されている。それゆえ、国立大学、特

に人文社会科学系学部がこのような状況に置かれることになった、より大局的な社会的背景について考えてみたい。

第一に、もっとも根本的な背景として、日本社会の急速な高齢化に伴う歳出の拡大と財政収支バランスの悪化という事態がある。財政制度等審議会の「平成二七年度予算の編成等に関する建議（平成二六年一二月二五日）」には、「我が国の予算は、急速な高齢化の進展による社会保障関係費等の増大により歳出が伸び続けている一方、税収は伸び悩み、近年では歳入の半分を借金に依存せざるを得ない状況が恒常的に続いている。新規国債発行額が増加傾向にあり、その結果、国債残高は国際的にも歴史的にも類をみない水準となっている」という記述がある。支出の中で増大しているのは社会保障関係費であるが、二〇一五年度に五兆三六一三億円を占める文教及び科学振興費、うち約二割を占める国立大学運営費交付金も国家財政にとって負担とみなされている。それをいかに効率化するか、すなわち可能な限り国立大学にかかるコストを削減するとともにベネフィットやリターンを拡大するかということが、政府――中でも財務省――にとって、きわめて大きな関心事となっているのである。国立大学、あるいは大学全般、ひいては教育全般を考える上で、この点は看過することができない。

第二に、こうした財政面からの要請は、文教・科学技術政策において、「①少子化の進展を踏まえた予算の効率化、②民間資金の導入促進、③予算の質の向上・重点化、④エビデンスに基づくＰＤＣＡサイクルの徹底」（二〇一五年六月三〇日閣議決定「経済財政運営と改革の基本方針二〇一五～経済再生なくして財政健全化なし～」）という形で具体化されている。国立大学法人運営費交付金は、この①～④のいずれにも密接にかかわるものとして位置付けられており、「重点配分」による効率化と、国立大学の自己収入の拡大がそのための主要な手段とされている。

後者の自己収入拡大については、二〇一五年一〇月二六日の財政制度等審議会財政制度分科会で、財務省は国立大学の自己収入を毎年一・六％増加させるという計画を示している。一二月一日開催の衆議院文部科学委員会で文科省が示した試算では、これを授業料値上げで補填した場合、一五年後には授業料が現状より約四〇万円増の約九三万円に上がるとされている（ただし二〇一六年三月四日の文科省発表では、これほどの値上げの予定はないとされている）。

第三に、前者の運営費交付金の「重点配分」がなされる対象は、様々な点で国家にとって「望ましい」とされる国立大学の諸機能であるということは言うまでもない。その諸機能として掲げられているのが、「国立大学改革プラン」にも示されていた、①世界最高の教育研究の展開拠点、②全国的な教育研究拠点、③地域活性化の中核的拠点の三つであり、すでにそれぞれを一六大学、一五大学、五五大学が選択している。これらのいずれかの面で個々の国立大学が機能強化に取り組むことにより、運営費交付金と個別の

競争的資金を合わせてようやく一定の予算を獲得できるという体制が、すでにほぼ確立されているのである。

第四に、このように国立大学が集中的なターゲットとされる理由は、私立大学との間の費用負担構造の明確な相違である。教育経済学者の矢野眞和氏は、国立大学と私立大学の費用負担と便益および収益率を推計した上で、次のように述べている。

「世界的な傾向と大きく異なるのは、私立大学である。最も大きいのが財政的収益率の九・六％、その次が社会的収益率であり、私的収益率は最も小さく、六・四％にとどまる。驚いてしかるべき結果である。個人に帰属する便益よりも、政府に帰属する便益のほうが多いのだ。（中略）（引用者注：国立大学は）私立とは逆に、私的収益率が最も高く、財政的収益率が最も小さい。政府からの支援が大きい国立卒業生は、納税による政府への返却分を上回るほどに私的便益を享受していることになる」（矢野眞和「費用負担のミステリー」『シリーズ大学③　大学とコスト――誰がどう支えるのか』岩波書店、二〇一三年、一八二頁）。

すなわち、政府の側からみれば、国立大学は「金食い虫」であるのに対し、私立大学は非常に費用対効果が大きい。しかしそれは、大学に就学する個人の側から見れば逆に、私立大学は自らが払った費用に比して私的便益が小さく、政府や社会に言わば簒奪されるような状態を意味する。矢野氏はこの私立大学の「異常さ」を指摘しているが、政府、特に財務省にとっては、国立大学の方を「私立大学並み」にしてゆきたいという意図が強く働いているのである。

こうした、国家財政、文教政策、国立と私立の分断などが絡み合う文脈の中に、今回の文科相通知問題はがんじがらめに埋め込まれている。それではこうした状況に対して、国立大学人文社会科学系の側としては、通知に唯々諾々と従う以外に、いかなる選択肢がありうるのだろうか。

5　どのような考え方と対応が可能か

展望の手掛かりを得るために、再び吉見氏の『衝撃』本を参照してみよう。吉見氏は、「文系は役に立たなくても価値がある」という主張では「理系は役に立つから価値がある」という主張に対抗できないとし、それに代えて「文系は役に立つ」と主張するべきだ、としている。では、どのような意味で「文系は役に立つ」のか。吉見氏によれば、「「文系」の知は、価値の軸の変化を予見したり、先導したりする価値創造的な次元を含み、「長く役立つ」知で、主に理系が得意な「短く役立つ」知とは次元が異なる」（一〇九頁）。さらに、「大学は、人類的な普遍性に奉仕する機関であって、国立大学といえども国に奉仕する機関ではない」とも吉見氏は述べている。

このような吉見氏の見解に賛同する者は筆者だけではないだろう。しかしここで考えるべきは、政府は、特に財務省や文科省は、こうした主張を投げかけられて、国立大学

やその中での人文社会系に対してこれまで示してきた、機能強化と財政効率化の要請を翻すだろうか、ということである。長期的な価値創造、人類的な普遍性への奉仕という人文社会系の意義の主張は、逼迫した国家財政という現実のもとで、短期的かつ目に見える便益を求める立場に対して、どれほどの説得力を持つのだろうか。

筆者は、本気で政府と対峙するためには、いったん相手の土俵に乗ってみせながら、かつ相手に阿るのでなく、自らの存在意義を示す必要があると考える。つまり、長期的な価値創造や人類的な普遍性よりも一段階抽象度を落とした、産業・経済・政治・社会といった目前の課題に対してもなお、「文系は役に立つ」と十分に主張することができるはずだ、というのが筆者の考えである。

たとえば、産業や経済の側面について言えば、自然科学系のみの重点・化は旧来の製造業中心的発想であり、第三次産業化が趨勢的に進行する中で、人文社会科学系諸学の重要性はむしろ高まっていると考えられる。文化産業や観光産業を振興する上では、歴史・文学・芸術・などの人文科学系諸学が深みと厚みをもって存在することは不可欠であるし、強靭な経済社会制度を自治体でも国全体でも作り出してゆく上で、法学・経済学・社会学・政治学などの社会科学系諸学は有益である。そのような意義の主張を、人文社会系の諸学問は、もっと自信と誇りをもって、強く打ち出してゆくべきである。すなわち、改組や定員削減などの組織的・外形的な対応策以外に、人文社会系の学問の内実そのものを、社会の実状に対して密接に寄与しうる形で強化してゆくという選択が、もっとなされる必要がある。

その具体的なあり方は、個々の学問分野や国立大学の特性によって異ならざるをえない。まずは分野別、大学別の試みがなされ、それが共有化されてゆくことが望まれる。人文社会系――特に国立大学における――の、目下の現実に対する有用性を、より説得的に示すための言葉と成果を確実に積み重ねてゆくことが、文科相通知に対する正しいリアクションなのではないだろうか。

DVDブック
甦る民俗映像
ライブラリー版
―渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア―
［編集委員］
宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄
原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲
日本・アジアの暮らしの原像がいまここに
DVD6枚・A5判 本体50,000円

模倣と権力の経済学
―貨幣の価値を変えよ〈思想史篇〉―
大黒弘慈
貨幣・国家・経済的人間像の別様の可能性のために
四六判 本体3100円

マルクスと贋金づくりたち
―貨幣の価値を変えよ〈理論篇〉―
大黒弘慈
『模倣と権力の経済学――貨幣の価値を変えよ〈思想史篇〉』の姉妹篇
四六判 本体2700円

思想史としての現代日本
キャロル・グラック
五十嵐暁郎編
日米の歴史家たちが現代日本を「思想史する」「日本の現在」を透視する歴史的想像力
四六判 本体3500円

ローマ帝国の東西分裂
南雲泰輔
古代史の大問題に取り組み，新しい歴史像の提示を試みる
A5判 本体7000円

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
（定価は表示価格＋税）
http://www.iwanami.co.jp/

特集＊文系廃止？――文科相通知騒動と国立大学改革のその後

文化の成長と育成――首都圏国立大学の状況から

河野真太郎（一橋大学准教授）

本稿は、二〇一五年六月八日付けで、前文部科学大臣・下村博文名で出された通知「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」がもたらした影響を、首都圏の国立大学の内部の視点から述べることを目的としている。通知は「教員養成系や人文社会科学系学部・大学院〔を〕、組織の廃止や社会的要請の高い分野に転換する」よう求め、大きな衝撃をもたらした。「文系お取りつぶし」とも取れる要請が、私が所属する一橋大学のような大学にいかなる影響をもたらしており、今後もたらしうるのかを、まずは考えていきたい。だが、最終的には「通知」は少なくともここ二〇数年の歴史を持ち、現在も進行中の大学改革という氷山の一角だという認識が重要になるだろう。

私の立場をはっきりさせておくと、私は正式には「一橋大学大学院商学研究科」に所属している。かといって、商学の研究者ではなく、専門分野はイギリス文学・文化である。それなのに、なぜ商学部なのか？ じつのところ、文学や言語、もしくは広くリベラル・アーツを専門としつつ、その専門とは関係のない学部に所属する教員が生まれた歴史と、昨年の「通知」をめぐる事情は深い関係にある。

一橋大学は大学院を持つ社会科学系の四学部（商・経済・法・社会学部）と、言語社会研究科を含む学部をもたない三つの独立大学院で構成されている。このような大学が、「通知」の対象になるかどうかは微妙である。通知に対する否定的反応に対して下村前文部科学大臣が九月一一日の記者会見で釈明したように、通知における「廃止」は教員養成系の学部、特にいわゆる新課程（ゼロ免課程）を対象としていた（それにしても、通知の表現が「誤解を与える」と認めるのなら、通知そのものを撤回すべきだろう）。一橋大学は、教員免許の取得は可能だが、教員養成系の学部をもたないので、その点ではこの通知の直接の対象ではない

（「新課程」について詳しくは横浜国立大学の「新課程」である教育人間科学部人間文化課程の室井尚氏による『文系学部解体』（角川新書、二〇一五年）を参照）。

では、通知にある「人文社会科学系学部」の方はどうか。一橋大学の学部は社会科学の学部なので、定義上は全学が通知の対象となる。しかし、事情はそう単純ではない。「社会的要請が高い分野に転換」すべき学部は、社会科学よりは人文学の学部である公算が高いのである。この点は、問題の通知だけでは分からないだろう。短い歴史的スパンで見ると、この通知は二〇一三年六月に閣議決定された「国立大学改革プラン」の路線を引き継いでいる。二〇一二年一二月に発足した第二次安倍内閣の私的諮問機関として結成された「教育再生実行会議」は、従来大学をめぐる指針を示してきた中央教育審議会の大学分科会の意向を鑑みず国立大学の「ミッションの再定義」と「国立大学改革プラン」を急激に押し進めたが、すでにその中に教育学部の新課程廃止が盛り込まれていたのである。

この改革の目指す先を理解するには、二〇一四年五月六日、ＯＥＣＤ閣僚理事会における安倍総理大臣基調演説を見れば十分かもしれない（http://www.kantei.go.jp/jp/96_abe/statement/2014/0506kichokoen.html）。首相は、「私は、教育改革を進めています。学術研究を深めるのではなく、もっと社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、職業教育を行う。そうした新たな枠組みを、高等教育に取り込みたいと考えています」と述べた。一国の首相がその国の高等教育について、世界に向けて述べた言葉としては、「歴史的」である。大学を職業教育の場にし、深い研究は不要と言ってのけたこの演説は、その後の安倍内閣の政治手法を考えれば、笑って済ませられるものではない。「通知」へと至る大学改革には、「社会的な有用性／無用性」「狭い学術研究／広く実践的な人材育成」といった単純な対立図式が否応もなく入り込んでおり、確実に有効性をもって作用している。通知の「社会的要請の高い」という文言にはそのような意味が込められているのだ。

典型的な特殊事例としての一橋大学

そのような流れの上にある「通知」は、あらゆる教育政策と同様、個々の大学の状況に応じた力学のもとにおかれることになる。一橋大学もまた、かなり特殊な国立大学であり、通知が持つ意味は相応に特殊である。だが、その特殊性はある種の普遍性・典型性を持った特殊性なのである（ややこしい話で申し訳ないが）。

一橋大学は、私塾、商法講習所（一八七五年に設置）を一九二〇年に改組した旧制官立大学の東京商科大学を前身とする。「一橋大学」に改められたのは一九四九年の学制改革で新制大学に移行した際のことであり、この時点で商学部・経済学部・法学社会学部（後に法学部と社会学部に分離）が設置されている。この歴史と昨今の改革との関係に

ついては、一橋大学の鵜飼哲氏が『現代思想』の特集「大学の終焉――人文学の消滅」（二〇一五年一一月号）の中で述べている。一橋大学は商学という「実学」に始まり、そこに法学や社会学が加わって「「社会科学の総合大学」という不思議な自己規定」にいたり、一九九六年には言語社会研究科という、最も人文学寄りの独立大学院が設立された。実学から社会科学へ、さらに人文社会科学の総合大学へ、という「発展の論理」がその歴史にあるというのだ。

ところが、先の安倍首相の演説が端的に示すように、昨今の大学改革はこの流れを引き戻すように作用している。一般的には理系対文系と表象される対立軸が、文系には実学対虚学として持ち込まれるのが、例えば一橋大学のような歴史を持つ大学では、実学を旨とするかつての商科大学へと引き戻したい人びとにとっては渡りに船となり、学部間、学部内に様々な分断線が引かれることになる。現学長は二〇一五年三月に「一橋大学強化プラン（1）」として「3つの重点事項」を挙げたが（http://www.hit-u.ac.jp/guide/message/150323.pdf）、二つは「グローバル人材の育成」と「「スーパー・プロフェッショナル・スクール」の構築」である。この類いの文書は、大学や学長が自律的に教育の理想を示したというよりは、文科省向けに書かれたものとみなすべきだが、ともあれ「もっと社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、職業教育」を目指していることは確実であり、「スーパー・プロフェッショナル・スクール」という文言を批判する人文系の教員と、それを推進する側との対立は深刻の度合いを増すばかりである。

こうした対立は、一種の「分断統治」である。残念ながらそのような中で、教養教育は当面の間は縮小の一途をたどるであろうし、たとえ世の中の潮目が変わり、人文学や教養教育が見直される時が来たとしても、その時点で、知の重要な連続性と継承は失われているだろう。

他の多くの大学と同様に、一橋大学の教員の中には、以前なら「教養課程」を担当していたような教員が、相当数いる。そういった教養課程の残滓が、消し去られようとしているのだ。例えば英語は、最近は「実用的な英語」が声高に叫ばれ、かつてなく重視されているとも言えるが、かといって私のようなタイプの教員の居場所は狭まる一方である。一橋大学では一部英語科目を外部業者に外注し、業者から派遣された英語のネイティヴ教師が「スキル科目」なるものを教えている。これまでも英語科目で教えてきたのは「スキル」（いかに読み、書き、聞き、話すのかはすべてスキルである）なのだが、これを導入する側からすれば、「スキル」は英語で喋ることに限定されるらしい。それにより、従来の英語科目は「非スキル（虚学）」であるという意味づけが行われる。第二外国語をめぐる状況はさらにひどい。

昨年の通知は、確実にこの状況を加速させるだろう。それは教養教育を担当する人文系教員のポストの消滅のみならず、そうした教員を育ててきた文学部のさらなる危機を

意味する。日本に蓄積されてきた人文系の知の継承は不可能になるだろう。例えば、半世紀後に、フランス語やドイツ語を（さらに言えば、英語でさえも）まともに翻訳できる人間はいなくなっているのではないか、というのが、偽らざる予測である。

「改革」の歴史、新自由主義の歴史

この状況に絶望しないためには、長い歴史的スパンのなかで、現状がいかにして成立したのかを認識することが必要だろう。昨年の通知は、短いスパンで見れば第二次安倍内閣による大学改革を文脈としている。だが、一九九〇年代までさかのぼれば、それは一九八〇年代以降の新自由主義政策の延長線上にある（この指摘は新しいものではない。先に触れた『文系学部解体』、また光本滋『危機に立つ国立大学』（クロスカルチャー出版、二〇一五年）を参照）。

出発点にあると見なせるのは、一九九一年の、大学設置基準の「大綱化」である。「大綱化」というのは耳慣れない言葉だが、まさにその産物である大学評価・学位授与機構の英文資料では、「大綱化」は deregulation と訳されている。つまり新自由主義のキーワード「規制緩和」である。その際に緩和された「規制」のひとつが、一般教育（教養教育）と専門教育との区分、さらには、かつての一般教育の中の科目区分（人文・自然・社会・外国語・保健体育など）である。これを受けて、続く数年間に、全国の各大学は一般教育課程や教養部を様々な形で「解体」していった。

今の言い方は実は少しミスリーディングで、上に述べた一般教育と専門教育の区分の撤廃は、区分の「禁止」を言うのではない。どのような区分で教育を行うかが各大学に任されるようになったということである。実際、大綱化の背景となる答申を出した大学審議会（一九八七～二〇〇〇年）は、この区分撤廃が引き起こした教養教育の軽視と専門教育の重視を意図してはいなかったとも言われる。例えば、一九九八年に大学審議会が出した答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について』（http://www.mext.go.jp/b_

時間かせぎの資本主義
いつまで危機を先送りできるか
シュトレーク　国家は市場と結託して、経済危機を先送りしてきた。民主主義的資本主義の解体過程を辿る。**鈴木直訳 ¥4200**

身体の使用
脱構成的可能態の理論のために
アガンベン　哲学史二千年の後、新しい生・政治・倫理を開く観想とは。「ホモ・サケル」シリーズの最終巻。**上村忠男訳 ¥5800**

指紋と近代
移動する身体の管理と統治の技法
高野麻子　なぜ指先の紋様なのか。国家の課題とは。イギリス帝国から日本帝国、今日に至る生体認証技術の歴史的変遷。**¥3700**

文楽の日本
人形の身体と叫び
ビゼ　血みどろの人形と太夫の声から西欧理論を解体。芸能と哲学をむすんで、創見にみちた比較文化論。**秋山伸子訳 ¥4200**

正義の境界
オニール　グローバル正義に包摂されるのは誰で、排除されるのは誰か。哲学的境界と政治的境界を考察。**神島裕子訳 ¥5200**

不合理性の哲学
利己的なわれわれはなぜ協調できるのか
中村隆文　私たちの不合理さは不要なものなのか。ヒュームの理性批判を出発点に、「不合理性の可能性」を探求する。**¥3800**

共通文化にむけて
文化研究 I
想像力の時制
文化研究 II
ウィリアムズ　英国文化思想家の全貌。日本独自編集版、完結。
川端康雄編訳　①¥5800 ②¥6500

msz
東京文京本郷5丁目32-21　みすず書房
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税別）
http://www.msz.co.jp

menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm）では、教養教育の軽視の風潮に対して警鐘が鳴らされ、「改革方策」の中では教養教育の重視が打ち出されている。

いかにも日本らしい話だが、実際には、競争原理によって大学が個性化・多様化するどころか、カリキュラム改革とはすなわち教養教育の解体である、という風潮が支配的になった。上記の一九九八年の答申の後の一五年間においては、九〇年代に緒についた「改革」が、完成させられていった。しかし現実には語学をはじめとする一般教育が必要なことに変わりはなく、結果として、大学の語学の教員が否定的な圧力にさらされながら、制度的な支えのないままに、自分たちの倫理のみを頼りとして教育を行う状況が生じている。ちなみに、教育学部の「新課程」も、この大綱化によってあふれた教養系の教員の受け皿という側面もあったので、問題は通底している。

教養教育をめぐる大学改革が、新自由主義的政策の一環だとすれば、教養教育改革と人文学の凋落は大学をめぐるほかの改革と地続きだということになる。ほかの改革とは、例えば「受益者負担」を旗印とした授業料のつり上げや、昨年度から施行された改正教育基本法および国立大学法人法である。後者は、教授会の意志決定機関としての役割を削減し、学長の「ガバナンス」（つまり学長の恣意的な決定権）を強化するものだ。この法制に乗じた次の動きが、例えば『富山新聞』（二〇一六年一月一一日）で報じられた、馳文部科学相の発言である。曰く、「学長……などを決める際、組織内で意向投票をしている大学はガバナンスの観点から改革の意志があるのか疑問だ。〔運営交付金の〕配分に関しては厳しく評価する」。大学の意志決定のこのような非民主主義化は、新自由主義下でなくとも起こりうるが、現在は確実に新自由主義による、一言で言えば大学を市場の餌食として開放せよという命令を実現するためのものである。

文化の成長と育成

だが、今、この三〇年間来の新自由主義に否をつきつける動きが起こっている。二〇一一年にアメリカで始まった「ウォール街を占拠せよ」運動は、富を独占する上位一パーセントに対する抗議運動であったし、英米では社会民主主義的な旗幟が鮮明なジェレミー・コービンやバーニー・サンダースといった政治家が若者を中心に人気を集めている。アジアに目を向ければ二〇一四年香港での「雨傘革命」、そして日本では、「ブラック企業」を告発する新たなタイプの労働運動が興っている。また二〇一一年以降の反原発のデモ運動は、昨年の安全保障関連法案への反対運動における、新たな「デモの文化」に結実した。

このうねりの中で、新自由主義化する高等教育への対抗運動も起こっている。例えば、二〇一二年に、学費増額に対抗してカナダのケベックで起こった五〇万人規模の学生ストライキ。イギリスでは、度重なる学生デモに加えて、

二〇一五年にはロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（ＬＳＥ）で、新自由主義的な大学行政に反対して「ＬＳＥを占拠せよ」運動が起きている。日本でも例えば栗原康『学生に賃金を』（新評論）のような本の出版、本当の意味での奨学金の不在の問題化、学生を食い物にする「ブラックバイト」の告発、また、これは筆者が関わっている活動（国立人文研究所によるKUNILABO）であるが、大学外で人文学を教える活動がそこかしこで起こるなど、新自由主義とその要請に従った教育政策にはうんざりだという感情が、渦を巻き始めている。

この動きの中では、新自由主義の否定と、民主主義的な社会の要求が切り離せない一体のものとなっている。最後に強調したいのは、その点において、人文学的なものが果たすべき役割である。イギリスの批評家・小説家であるレイモンド・ウィリアムズは、主著『文化と社会』（一九五八年）の中で次のように述べている。

> 共通文化の理念は……自然な成長と、育成という両方の理念を総合したものである。自然な成長だけでは、それはロマン主義的な個人主義の一タイプとなる。後者の育成の理念だけでは、それは権威主義的な訓練となってしまう。だが、すべてを全体的に見たときには、その両方が重要で必要なものとして浮かび上がってくる。民主主義を求める闘争は、存在の平等の承認を求める闘争でなければ、それは無である。だが、人間の個性と多様性を認めるところにのみ、共同の統治の現実は構成されうるのだ。

新自由主義が登場するはるか前に、ウィリアムズはその文化の論理を見抜いていた。新自由主義は、文化は自然に成長する（べきだ）と考える。その場合の「自然」とは「市場」であり、市場で淘汰され勝ち残った文化のみが生き残るに値する文化とされる。だがこれまでも、人間の文化とはそのようなものではなかった。それは意図的な「育成」によって守られてきた。そして人文学はその一部を担ってきたのだ。ウィリアムズの言う共通文化とは、社会の成員みなが個人としてその選択と育成に関わるような民主主義的な文化であり、この自然の成長と意図的な育成の両方が総合されたものであるべきなのだ。人文学は、危機にある今こそそのような「共通文化」を（それがどれだけ理念的・理想的に見えようが）問いかける術を学ばなければならない。その術を学んでこそ、人文学は、先に述べたような社会的運動の衝迫力をみずからのものとして、社会に力を与えうるものになる――真の意味での「有用性」を持ちうる――はずだ。そして最後に、現在危機にさらされている学問の自由とは、このような意味での共通文化のことである。それは限られた学者や大学人だけの自由ではない。それはあらゆる人にとっての共通の自由のことなのだ。

特集＊文系廃止？――文科相通知騒動と国立大学改革のその後

私立大学は無関係なのか？

寺脇研（京都造形芸術大学教授）

国立大学の文系学部廃止騒動の発端は、「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」と題した文部科学大臣通知である。

二〇〇三年制定の国立大学法人法により国立大学は国が運営する機関ではなくなり、独立行政法人の一種である「国立大学法人」となっている。従来の国立大学なら文部科学省の直轄であり、より強制性が大きい「通達」という形で行われただろう。法的拘束力のある「法令」と違い、「通知」は「通達」よりさらに弱くあくまで要望の域を出ないのだが、反響は実に大きかった。

それはそうだろう。「通知」に強制力はなくても、それが文部科学大臣の意向を反映していることは明確だ。国立大学法人は、旧国立大学時代の国立学校特別会計での運営とは異なり国からの運営費交付金を財政基盤としている。交付金を分配するのは文部科学省だから、大臣の意向に沿わないと減額されてしまう恐れがあると考えてしまうのは当然である。国立大学の間に激震が走った。

しかも現政権ときたら、安保法制などで立憲主義を踏みにじって平気という体質である。法令、通達、通知の法的拘束力の差異などお構いなしに強権発動するかもしれない。なにしろ、国立大学の入学式、卒業式での国歌斉唱、国旗掲揚を「税金によって賄われているということに鑑みれば、言わば新教育基本法の方針に則って正しく実施されるべきではないか」という粗雑な論理で国会答弁した首相の意を受けて文部科学大臣が国立大学長会議で「要請」するなどという横暴まで罷り通っている。こちらは入学式、卒業式という教育活動に対するものだから、通知より弱い「要請」だとしても憲法二三条に定められた学問の自由を侵す違憲行為ではないか。

国立大学が戦々恐々とするのも無理はない。いきなり文

系廃止とは唐突で乱暴な議論だものね。でも、それに対する反論は当の国立大学関係者に譲ろう。わたしに課されているのは私立大学の側からの見解だ。

ずばり言わせてもらえば、国立大学の文系廃止と聞いての第一感は、これは私学のチャンス！　だった。だってそうだろう。国立が文系を廃止したからといって、文系の学問をしたい学生がいなくなるわけではないのだ。国立が廃止されれば彼らはわれわれ私学の門を叩いてくれるに違いない。棚からぼた餅？　そんなさもしい了見ではない。私学の文系教育の価値をフェアに評価してもらえるチャンスだという認識である。

わたしの勤務する京都造形芸術大学も、理事を務めている東北芸術工科大学も、教育面において国立に全くひけを取らないと自負している。他の私学でもそれだけの自信を持っている大学は少なくないだろう。しかし、われわれは私立であるために学生に高額の学費を負担してもらわなければならない。私立には運営費交付金などないからだ。

国立大学法人の収入の内訳（付属病院収入を除く）は現在、運営費交付金が五一・九％、補助金等収入（一五・六％）を加えれば六七・五％と、約三分の二が国からの支出に依存している。独自財源である授業料等収入は一四・七％で、七分の一程度にすぎない。これに対し私学は、収入のうち学生納付金の割合が七六・九％と四分の三を占めており、私学助成など国からの補助金は一〇・九％しかない。

一九七五年の私学振興助成法成立時には補助割合五〇％を目標にしていたはずの助成は、八五年に二九・五％に達したのをピークに割合を減じ、今や一割そこそこだ。これでは授業料に大きな格差が生じるのも致し方あるまい。

国立の授業料が年間約五四万円なのに対し、私立文系平均はその二倍以上の約一一六万円である。これでは、いくら私立がいい教育を提供したとしても国立に互角で太刀打ちするのは難しい。授業料の安い国立を受験生が志望するのは多くの場合当然だろうし、高校も国公立への進学を奨励する。この習い性が、進学系高校において国公立にどれ

新刊案内

小馬　徹 著
フィールドワーク事始め
A5判・六〇頁・本体九〇〇円
――出会い、発見し、考える経験への誘い
文系の学問の場合、まさしくフィールドワークこそが「記述主義」の基本姿勢を身に着ける最も具体的で実践的な方法となる。

太田仁樹 著
論戦 マルクス主義理論史研究
A5判・三七四頁・本体六五〇〇円
近年のマルクス、カウツキー、ヒルファディング、レーニン、ローザ・ルクセンブルク、コルシュ、研究の到達点と新たな課題に迫る。

安彦忠彦 著
教育史の中の内村鑑三
A5判・八八頁・本体一〇〇〇円
内村鑑三の生涯とその継承者たちの活動を通じて、明治から現代までの公教育批判と「市民の自己教育」の重要性を再認識する。

田島俊雄・張馨元・李海訓 編著
アズキと東アジア
A5判・三五〇頁・本体六八〇〇円
――日中韓台の域内市場と通商問題
二〇一六年は国連「国際マメ年」。日本は中国産小豆をいつまで輸入できるのか、小豆から学ぶ東アジアの経済発展・経済関係。

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

だけ合格者を出すかが学校の実績を左右するかのような風潮を生んできた。

生徒が私立を受験するというと説得して国公立を受けるように誘導する例を数限りなく聞いている。文部科学省の現役官僚にも、国公立受験を強く勧める教師から自分の志望する早稲田大学への内申書作成を拒否され一年棒に振って敢えて浪人し早稲田への入学を貫いた者がいる。早稲田にしてこれほどの圧力を受けるのだから、他は推して知るべしだ。受験指導は一にも二にも、まず国公立なのである。

私立の側はここのところで常に口惜しい思いをしてきた。どんなにいい教育を提供しようと、学費の大きな壁に阻まれる。だが国立文系が廃止されるとなると、文系に関しては全く違う状況になる。文系の受験生が進学先として選べるのは公立を除けば私立だけということになり、彼らから志望校にしてもらえるかどうかは学費と関係なく純粋に教育の質比べになるのである。

わたしも大学人の端くれとして政権の強引な手法、なかんずく憲法二三条を踏みにじるようなやり方にはもちろん断固反対する。しかし、私学人の端くれとしては国立文系廃止と聞けば、これで教育の質で勝負できるのだ、と勇躍してしまう。おそらく、私立文系の関係者にはわたしと同じ思いを抱いた方が少なくなかったに違いない。国立との授業料格差は私立にとってそれほど大きくて重い枷なのだ。

なお、「端くれ」と記したのは謙遜ではない。元文部科学省の役人で学士号しか持たぬ者が、たかだか九年余り大学の教員をしているくらいで「大学人」などおこがましい。もっとおこがましいのは「私学人」を名乗ることである。もともとわたしは国立の側からだけ大学というものを見てきた。生い立ちからしてそうなのである。文字通りの「国立大学育ち」。

生まれたとき父は九州大学医学部の教員、母方の祖父は医学部教授で後に総長となる。物心ついた頃から、周囲には常に国立大学の先生たちが溢れかえっていた。幼児期は医学部の構内にある小さな官舎に住み、大学の中が遊び場だった。父も祖父も小児科だったから、しばしば病棟に入り込んでは、同年代の入院患者と遊んだり看護婦さんに相手をしてもらったりしていた。後年、文部省（当時）の医学教育課長になったとき、そのときの九州大学病院の看護部長さんが幼いわたしの面倒を見てくれた人だとわかり、気恥ずかしい思いをしたことがある。

進学先も国立大学。文部省に入ると「文部事務官」であり、鹿児島大学に転じ教授になっていた父は「文部教官」だったから同業のようなものだ。大学局（当時）やそれが改組された高等教育局でも仕事をしたが、当時の文部省の大学に関する行政対象はほぼ国立に限られていた。特に大学局の頃は内部で「国立大学局」と揶揄的に称されるほどだった。私立大学のことなど、ほとんど眼中になかったと言っていい。もちろん、そのぶん私立の自主性が尊重され

ていたわけだが。

高等教育局になり組織内に私学部が創設され、私学助成に教育・研究プロジェクト補助が可能になってからは私立大学の教育・研究内容にもいくぶんか目が向けられたものの、国立中心主義は変わらない。わたしが九六年から九七年に高等教育局医学教育課長をしていた際も、専ら国立大学医療系学部の振興策が仕事だった。私立とは卒後臨床研修問題や薬学部六年制問題など制度全体に関する関係しかなかった。いわば国立大学の申し子のような人生を経てきたと言っていい。私立の経営問題を考えてみることもなかった。

それが、文部科学省を早めに退職して「天下り」を断り、縁あって京都造形芸術大学という私学に勤務することになる。この大学の、学習者である学生を何より大切にする理念に、文部省、文部科学省で「生涯学習」を主に担当しライフワークとしている者として深く共鳴したのが志望動機だったが、創業者である学校法人瓜生山学園の徳山詳直理事長は大の文部科学省嫌い。それもそのはず、設立時になかなか認可が下りなかっただけでなく、その後も何ひとつ世話になった憶えがないという。無理もない。新興私立大学の経営者として偽らざる思いだったろう。実のところ「国立大学行政」しかしてこなかった自分として忸怩たるものがあった。

理事長の厳しい面接をなんとか通ってこの大学の一員となった。よくぞ採用していただけたものである。七七年に京都芸術短期大学としてスタートし、九一年に京都造形芸術大学を開学した歴史のまだ浅い私学である。また、徳山理事長は学校法人東北芸術工科大学の理事長でもあった。こちらは、山形県と山形市が構想した公設民営の大学である。九二年開学の私学でやはり新興だ。当然両者とも、学生募集でも経営面でも厳しい状況下にある。

わたしが両大学の一員となるとき、理事長は「君もわれわれと共に戦え」と言った。そう、大学経営を「戦い」と位置付けていたのである。それほどの厳しさがあった。はっきり言って、文部科学省にいたとき国立大学の経営を「戦い」だなどとは感じていなかった。おそらく国立の現場の側もそうだったろう。

一方わが二大学には、少子化の中で生き残りをかけて戦う危機感と気概があった。なにしろ芸術系は、私立文系では最も授業料が高い。東北の方は私立文系の平均額に抑えることができているが、京都は授業料と施設費で年間一六〇万円余りかかる（文芸表現、アートプロデュース、歴史遺産の三学科は私立文系平均額並み）。

それだけの学費を払うためには学生自身もアルバイトなどで苦労している。そうまでして入学したいと思ってもらうだけの教育を提供するのが義務であることを、われわれ教員は徹底的に意識させられる。また、入学後に満足してもらうための努力も欠かさない。あくまで大学の主役は学

生であり、彼らの学習欲求を十分に満たすことが教員の責務なのである。これは決して「学生に媚びる」のではない。学びの満足を得てもらうことに全力を尽くすのが、われわれの使命と弁えている。

そのため、学生による授業評価の項目にも辛辣なものが用意されている。「この授業はあなたの人生に何かを与えましたか？」とか、ずばり「同級生や後輩にこの授業を取ることを勧めますか？」とかを、強くそう思う、そう思う、どちらとも言えない、そう思わない、全くそう思わない、の五段階で評価されるのは緊張する。それでも、学生たちに満足してもらえる授業を作っていくためには仕方ないと受け止めている。

教員全員がこれほどの努力をしても、授業料ゆえに学生が集まらないとしたら残念な限りである。幸い京都も東北も今のところ多くの志願者を集めることができ、特に東日本大震災で危ぶまれた東北はそれもみごとに乗り切った。だが、楽観は許されない。授業料の安い国公立に対して大きなハンディを負っているのだから。

だから正直なところ、私学側のエゴからすれば国立文系廃止はありがたいと思った。流行りの言葉でいえば「ゲス」な根性ですみません。とはいえ当然、社会全体からすれば反対の声が大きいだろうし、一気に実現は難しかろう。でも、この問題にかんする議論を広げていくうちに私立文系の力と位置づけについての話が出てくるだろうと密かに期待していた。

ところが……。きちんとした議論にはならず、国立文系廃止なんかとんでもない、との感情的に近い反対の嵐が吹き荒れる展開となった。世論は猛反発したのである。理屈以前の問題で、「大学には文系、理系の双方がなければ成り立たない」という乱暴な論まであった（もしそうならほぼ文系だけの一橋大学や小樽商科大学、理系だけの東京工業大学はどうなるの？　とツッコミを入れたくなる）。

そして、あまりの反響の烈しさに下村文部科学大臣（当時）は事務方の表現ミスであって文系廃止は事実無根と必死で釈明する羽目になる。これ、ご自分の名で出した通知のキモの部分をきちんと読んでいなかったのだろうか？　そもそも、「綸言汗の如し」という言葉をご存知なのだろうか？

そんなこんなで文系廃止騒動は一気に鎮静化してしまった。わたしの「ゲス」な目論見も潰えた。いやこれは潰えて当たり前なのだが、それはそれとして、今回の騒動では「国立文系」の必要性だけの話に終始し、私立や公立、短大や高専、専修学校を含めた高等教育機関全体における文系の位置付けについて論及されることが皆無と言っていいほどだったのは納得がいかない。通知に抗議して文系の重要性を力説した大学人たちも、国立大学しか眼中にないかのように見えた。

この際、高等教育全体を視野に入れ、この国に必要な大

学レベルの文系教育をどこがどう分担していくかの大きな議論こそなされるべきではないだろうか。政府（あるいはそのバックにいる財界）がどれだけ文系を必要とするかでなく、本来は国民が文系の学問をどれだけ学びたがっているかが前提とされなければなるまい。文学や法学、経済学、政治学、教育学等々を学びたいという若者が減っている気配は全くないのである。

一〇〇〇兆円を超す借金を抱える国家財政だから、削減や合理化が求められるのは理解できる。それに反論して高等教育の重要性を訴えるならば、国立大学への交付金、私立大学への助成金そして無利子、有利子の貸与型奨学金、さらには給付型奨学金の新設まで視野に入れ、それらにどういう比率でどれだけの量の税金を振り向けていくかを総合的に提案しなければまともに太刀打ちできない。財務省が個別の削減を迫るからといってそれに個別に反対していたのでは各個撃破されていくだけだ。文系廃止は沙汰やみになっても、国立大学運営費交付金削減の動きは止まっていない。

思い切ってコストのかかる国立を縮減して医療系など計画養成するもの以外の多くを私立に移行し、国立から私立へ変わったことによる授業料増加分は給付型奨学金でカバーするといったダイナミックな発想ぐらい出てきてもいい。実際、文系の中でも最も社会に対する経済的貢献が薄いと見られているに違いない芸術系では、総合芸術大学といえば国立では東京芸術大学しかなく、後は全て公立と私立に委ねられているではないか。そして、受験生の側からの私立芸術系大学の間の比較は現在でも教育内容如何にかかっている。

今回の国立文系廃止騒動を機に、国立、公立、私立皆で将来にわたる高等教育の姿を根本から考え直す大議論を起こしてはどうだろうか。政権の思いつきや財界の意向、財政当局の思惑に振り回されるのでなく、国公私の大学人全体でこちらから積極的に提案していくくらいのダイナミックな動きが作れればと思うのである。

「暗記する日本史」から
「考える日本史」へ―。
高校教科書とはちがう
新たな「日本史」との出会い。

大学でまなぶ日本の歴史

木村茂光・小山俊樹　１９００円
戸部良一・深谷幸治編
平易に叙述した格好の通史テキスト。

"あの戦争"とは何だったのか？

アジア・太平洋戦争辞典

吉田　裕・森　武麿
伊香俊哉・高岡裕之編
あらためて戦争を問い
直すための約2500項目を収録！
２７０００円　『内容案内』送呈

現代語訳**吾妻鏡**　ついに完結！
別巻 鎌倉時代を探る（最終回）
五味文彦・本郷和人・西田友広
遠藤珠紀・杉山　巌編　２８００円
本編全16巻の解説・注を補完し、
『吾妻鏡』の世界がより広く、深く！
本編全16巻揃価＝４０６００円

東北の中世史 全5巻
全巻完結！　各２４００円

❺東北近世の胎動

高橋　充編　豊臣政権の「奥羽仕置」以降、東北は時代の潮流にいかに向き合ったのか？　（最終回）
〈既刊〉❶平泉の光芒…柳原敏昭編／❷鎌倉幕府と東北…七海雅人編／❸室町幕府と東北の国人…白根靖大編／❹伊達氏と戦国争乱…遠藤ゆり子編

東北の古代史 全5巻
刊行中！　各２４００円

❺前九年・後三年合戦と兵の時代

樋口知志編　平泉政権の誕生前夜、激動の東北を描き出す。（第４回）
❹三十八年戦争と蝦夷政策の転換
鈴木拓也編　（続刊）

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税別

「社会的要請の高い分野」とは何か――地域志向型大学の現在と未来

足達薫（弘前大学教授）

「イタリア文学の学生はジョットを知らなくなり…「中略」…考古学の学生はギリシア語を読めなくなり、美術史の学生は最も簡単なラテン語文献に呆然とし、ダンテやアリオストを読んだこともないままその時代の美術作品に取り組むようになってしまった」。二〇〇二年、ピサ高等師範学校長をはじめ、世界各国の教育研究機関の長を歴任した考古学者サルヴァトーレ・セッティス（二〇一五年一〇月現在、ルーヴル美術館科学調査部門委員会の議長のようです）は、イタリアの大学改革について、このように憤りました。日本で言うならば、源氏物語絵巻を研究しながら『源氏物語』を読めず、写楽の役者絵を研究しながら歌舞伎を知らない学生が卒業するようなものです。

イタリアでは、国公立大学の赤字問題と教育研究成果の不振が長いあいだの課題であり、効率的で目に見える成果を挙げるため、カリキュラム改革がなされてきました。国立ナポリ大学で美術史を教えるトマーゾ・モンタナーリによれば、考古学と美術史が従来の文学部から切り取られ、新設の「文化財学部」に含められる例もありました。この学部のミッションは、文化財の保存や修復の技術を身につけ、グローバリゼーションの流れに最適化した即戦力としての「文化財のオペレーター」を養成することです。

言葉だけ聞くと、とてもよいことのように思われます。しかし、歴史・文学・哲学などの総体的文脈と知識から切り離された専門技術だけに特化したオペレーターたちは、文化財とそれを生みだした世界との本質的な結び付きを忘れてしまうかもしれません。一三〇〇年代前半のフィレンツェ絵画に描かれた地獄とダンテ『神曲』の間の結び付きを思い出せなくなるかもしれません。セッティスはこう嘆きました。「最初の犠牲者は大学生だが、いずれ時間とともに、我々の文化財そのものにさらに大きな被害が及ぶだ

ろう。そのうち、文化財を正しい方法で捉えることができる者が消えてしまうだろう［後略］」。

もしそうなったとしたら、学生の学力低下などよりもっと深刻な、文化そのものの質的低下です。教育改革は文化的光景を長期的に変貌させます。日本で現在進行中の大学改革は、日本の文化的光景をどのように変えるでしょうか。

平成二七年六月の文部科学大臣から国立大学法人へ送られた「通知」、および文科省から送られた「通達」では、教員養成および人文社会科学系の大学と学部は「組織の廃止や社会的要請の高い分野（理系分野を含む）への変換」をするべきことが告げられています。広く報道されましたし（たとえば『文藝春秋』二〇一五年一一月号）、本特集の他の方々が詳しく触れられると思います。

地方国立大学の文系教師は、この通知と通達（以後まとめて「通知」とします）をどう受け止め、何を考えたでしょうか。私は、平成一二年から弘前大学人文学部（この四月から「人文社会科学部」）で西洋美術史を教えています。私の例をここで少しお話しいたします。

報道では、通知がまるで文系への不意打ち、突然のリストラ宣告であるかのようなニュアンスが多少とも感じられました。しかし、私が知る限り、大学全体としても学部としても特に強い反応はありませんでした。私は「なぜまた?」という既視感めいたものを覚えました。なぜならば、少なくとも私の勤務先では、この通知の内容に対応した改革が進められていたからです。

それに触れる前に、現在進行中の国立大学改革の全体的流れを見ておきましょう。平成一六年の国立大学法人化とともに開始された文科省「国立大学改革プラン」では、「各国立大学の強み・特色を最大限に生かし、自ら改善・発展する仕組みを構築することにより、持続的な『競争力』を持ち、高い付加価値を生みだす国立大学へ」の転換という目標がかかげられました。平成二五～二七年は「改革加速機関」と位置づけられ、各大学で「ミッションの再定義」、つまりそれぞれの新しい目標が定められました。

こうして、各大学は世界最高水準の研究を目指すもの、全国的な教育研究の拠点を目指すもの、各地域の活性化の拠点を目指すもの（地域志向型）に分けられ、運営交付金等もそれに応じて配分されることになりました。地域志向型を選んだ弘前大学では、平成二六年一二月〈「地域志向」大学改革宣言〉が起草されました。これは、地域との連携を強化し、地域固有の課題に積極的に取り組む大学としての自己定義です。現在、青森県の命題である「短命県返上」、青森地域固有のブランド価値の開発、被爆医療のプロフェッショナル育成などを推進しています。

あわせてカリキュラムと教育組織も改革されました。平成二八年度から教育学部生涯教育課程（いわゆるゼロ免課程）の募集（定員七〇人）を停止し、人文学部も八〇人を減らしてその分を理工学部へ移しました。人文学部は人文

社会科学部に改め、教育カリキュラムも大きく変わり、地域社会・文化に関する科目がいくつも新設されました。全学教養教育でも「地域学ゼミナール」のような野心的科目が設けられました。

こうした流れのおかげで、今度の通知にあまり驚きませんでした。学長の強いリーダーシップ、学内での粘り強い説明があったことも大きな要因です。少なくとも私の眼には、今回の通知はこれまでの流れを再確認させる以上のものではありませんでした。私が国立大学文系教師の典型的例であるとは思いませんが、多かれ少なかれ、どこでも似たようなものだったのではないでしょうか。もちろん、個々の教員すべてがこの改革に完全に一体化したとはもうしません。たとえば、少子化にともなう受験生数の減少に応じたものであることは理解できるのですが、理系分野はそれほどまで「社会的要請が高い」のでしょうか。具体的な根拠が示されたことがあるのでしょうか。

それはともかく、今回の通知は大学改革の流れをあまり知らない人には突然の方向転換に見えたかもしれませんが、実際はそうではありませんでした。その本質はおそらく、各大学法人間の改革競争はこれからさらに熾烈になるぞ、覚悟しろ、というメタ・メッセージです。改革レースの折り返し地点を告げる合図のように聞こえます。

地方国立大学間の熾烈な改革競争では、どのような問題が考えられるでしょうか。

第一に、「社会的要請の高い分野（理工系を含む）への変換」の具体的なヴィジョンについての懸念があります。少なからぬ地方国立大学が、地域志向型を選びました。文科省では地域志向型を推進するための「知の拠点整備事業」などの大型プロジェクトを公募し、各大学間での差異化と競争を促しています。下村文部科学大臣（当時）は「社会的なニーズというのは産業界や経済界の要請でもない…［中略］…今の子どもが大人になったときに、いまの学部の勉強で通用するのかということ。たとえば地方の人材で見たときに、農学部や教育学部の専門知識だけでやっていけるのか。たとえば地域に資する人材を養成するなら、地域に特化した学問であるべきではないか」と述べています（『文藝春秋』前掲号、二八〇ページ）。

この方針そのものは理解できるのですが、それがしばしば不穏な言葉とともに私たちまで届いてきたことは、繰り返し強調されてよいでしょう。平成二六年一〇月の文科省有識者会議で提案されたいわゆる「富山レポート」は、現在進められている国立大学改革の流れの中に含まれた認識を示唆するきわめて意味深長な例です。この会議で、富山和彦さんが「少数のトップ大学以外、地方国立大学は職業訓練校になるべき」と提案したのです。その資料によれば、たとえばこれからの英文学部ではシェイクスピアと文学概論「ではなく」観光英語を学び、地域の歴史と名所についての知識を身につけるべきだというのです。政府や文部科

学省の公式声明ではありませんが、今も公式ホームページで公開されています（平成二八年二月二六日現在）。

地域志向型の地方国立大学が「地域の歴史と名所の知識」を伝えるオペレーター（より正確にはスピーカー？）の養成所に徹するならば、たとえば次の二つの点がないがしろにされてしまうかもしれません。まず、地域文化は永遠に不動の何か、時間から切り離された、命のない標本ではありません。次に、地域文化のアイデンティティーは常に世界全体に対して閉ざされたものでなく、開かれています。

あらゆる文化的価値は、絶え間ない修正と発見によって常に上書きされ、アップデートされます。それを実行しうるのは、指示を待つ端末機械ではなく、多様な文化的因子の基本的知識を自らの課題に結びつけて理解した、そして主体性と責任をもって発言する勇敢な人だけです。二〇〇四年フィレンツェで、小さな木彫の《キリスト磔刑像》が「新発見のミケランジェロ作品」として鳴り物入りで展示されたことがありました。文化財行政とマスメディアの大キャンペーンを経て、確実な根拠がないこの作品は、イタリア・ルネサンスのシンボルであるミケランジェロの真作として、イタリア政府によって購入されました（現在フィレンツェ、バルジェッロ美術館）。この顛末は、先に触れたモンタナーリが『ミケランジェロが何の役に立つのか』（二〇一一年）という刺激的なタイトルの本で詳しく扱っています。美術史学者たちの意見も二分され、モンタナーリ自身は否定派で、実際に政府に抗議を行ったといいますが、彼がなによりも問題視するのは、多くの美術史学者たちの「沈黙」でした。大学に勤める学者たちの意見そのものがきわめて少なかった事実が、大学そのものが「オペレーター」と化してしまうことの危険性を示唆しているのです。ちなみに、先に触れたセッティスは二〇〇九年、イタリア政府の文化行政の方針を批判して、文化財省の委員長役を辞任しています。

さらに、地域文化のアイデンティティーは、世界全てに対して開かれ、相互作用を果たすことで形成され、確かめ

藤原書店

トッド 自身を語る
E・トッド 今、世界で最も注目されているトッドとは何者か。世界の行く末を鋭い洞察力で見通す。 石崎晴己・編訳 2200円

アルメニア人の歴史
古代から現代まで
G・ブルヌティアン もう一つの「ディアスポラの民」の三千年史。 小牧昌平・監訳 渡辺大作・訳 8800円

中世と貨幣
歴史人類学的考察
J・ル=ゴフ “貨幣”は近代の産物である。中世史の泰斗による貨幣論の決定版。井上櫻子・訳 3600円

佐野碩 人と仕事
1905-1966
菅孝行・編 「メキシコ演劇の父」の全貌！佐野自身の論考も集成。 歿50年(2016)記念出版 9500円

龍馬の遺言
近代国家への道筋
小美濃清明 「江戸の銀座を京都に移せ」！龍馬の描いた近代日本の国家像とは？ 2500円

これからの琉球はどうあるべきか
大田昌秀 安里英子＋安里進＋伊佐眞一＋海勢頭豊＋川満信一＋我部政男＋三木健 2800円

珊瑚礁の思考
琉球弧から太平洋へ
喜山荘一 琉球の死生観とは何か？文字を持たなかった時代の琉球弧の精神史を辿る。 3000円

月刊 機 B6変32頁 2月号 №287
金時鐘／鈴木麻矢／岡田英弘／渡辺利夫／岩倉具忠／小倉和夫／中村桂子／山崎陽子／尾形明子／加藤晴久／川満信一 ほか
年間購読料2000円(送料込) ◎見本誌・ブックガイド呈 ＊表示価格税抜
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013 TEL 03-5272-0301
ホームページhttp://www.fujiwara-shoten.co.jp/

られます。たとえば、英国で文学教育を受けた人に太宰治の魅力を説明するとしましょう。太宰治の経歴や作品のあらすじを語ればいいでしょうか。しかしそれでは、説明される側とする側のどちらにとっても、太宰はエキゾチックな他者、死んだ標本のようなものです。それならば、太宰がシェイクスピア『ハムレット』を脱構築した「新ハムレット」を書いていることを紹介したらどうでしょうか。それらにはどのような共通点と相違点があり、太宰の文学の特質や津軽という地域との結び付きは、これこれこういうところに現れている、と理解することで太宰は「開かれる」にちがいありません。

地域志向型地方国立大学で育まれるべきなのは、「シェイクスピアと文学概論〈ではなく〉観光英語と地元名所の知識」ではなく、「シェイクスピアと文学概論〈および〉太宰治と日本文学の知識〈および〉それらを本質的に結びつけることのできる発見力〉」ではないかと思います。観光英語で誰かが書いたテキストを読むオペレーターではなく、世界に開かれた地域文化の本質的魅力を自ら発見し、それを伝えていく方法そのものを発見することのできるクリエーターこそが必要ではないでしょうか。

気にかかる第二の点は、これからの地方国立大学間での競争において必ずや焦点となる学生の出口の問題は、大学だけが力んでどうにかなるものではないこと、そして短期間で転換したり改善したりできる代物ではないということです。大学の改革を評価する際、学生の進路状況はきわめて明確な基準になると思われます。しかし、大きな企業を誘致したり、新たな就職先を創造したりすることが容易に実現できるわけがありません。これは、文系理系を問わない共通の巨大な問題です。今回の通知で、このことへの何らかの先手を撃つことができた大学はどれだけある（あるいは「あった」）でしょうか。

気がかりな第三の点は、「文系vs理系」のような図式が、しばしば「虚学vs実学」へ、あるいは「儲からない学問と儲かる（かもしれない）学問」へと次々に変奏されていく風潮があるように見えることです。

私が専攻する美術史に関して言えば、彫刻や絵画や建築の見学や調査、あるいは作品の購入と展示には、お金を生みだすどころか、逆にたくさんのお金を使うことが必要です。教育研究そのものが、いわば（国家や大富豪に比べればはるかに貧しいですが）パトロンのようなものです。換言すれば、現在生きている（「私」を含む）人たちだけのことを念頭に置いて「社会的要請」を考えるならば、美術史のそれが高いとは言えません。儲かるか儲からないか、という観点からは、明らかに要請は低いことになります。

しかし、お金を生みだす学問があってよいとすれば、お金を使うための方法を練り上げ、開発する学問も必要なはずです。私たちはこの日本で今現在生きている人たちとだけつながって暮らし、愛し、笑い、努力しているのではあ

りません。私たちは、過去の世界とも、そして世界中の人ともつながって生きています。そのつながりを絶え間なく再発見し、必要ならばその都度、修正や検証をしながら、人生に役立てていかなければなりません。

二〇一四年、成城大学文芸学部で開催されたシンポジウムに基づいた『〈西洋美術史を学ぶ〉ということ』（喜多崎親編、高階秀爾、千足伸行、石鍋真澄著、三元社）では、この儲からない美術史を学ぶ価値が問われています。高階秀爾氏は、「［前略］芸術家なり愛好者なり、過去の人、遠くの人を含めて、心の合う友達ができることです。これは非常に大きな役得だと思います。私自身、同業者以外でも、今はもういない人に対しても、美術史をやることによって非常に多くの友を得ることができました」と語っておられます。私も同感です。お金を稼ぐことはできないかもしれませんが、より楽しく気持ちよく生きているための方法、真に投資する価値のあるものを発見する方法がまだたくさんあるはずです。文系と理系は、喧嘩したりπを奪い合ったりするのではなく、その方法を練り上げ、教え合い、伝えていくことができるはずですし、そうしなければなりません。

以上、「甘い」、「理解不足」と言われるかもしれませんし、組織を代表する意見でもありません。それでもなお、なんらかの資料的・証言的価値もあろうかと思い、今回の大学改革を現在進行形で経験中の一教師の眼に映ったイメージをお話しいたしました。

謝辞

メタ・メッセージという考え方については養老孟司先生から、『ハムレット』と「新ハムレット」との比較については亀山郁夫先生から強い示唆を受けました（二〇一四年に開催された弘前大学出版会設立一〇周年記念講演会）。また、弘前大学人文社会学部長、今井正浩氏からいくつかの資料をお借りしました。皆様に感謝いたします。

NBS Nippyo Basic Series 日評ベーシック・シリーズ

憲法II 人権
新井 誠・曽我部真裕
佐々木くみ・横大道 聡［著］
憲法の基本が深く理解できる教科書。判例と学説の現在を丁寧に解説し、憲法学の世界に読者を誘う。（I＝7月刊）■1,900円＋税

基本刑法I 総論［第2版］
大塚裕史・十河太朗
塩谷 毅・豊田兼彦［著］
定番となった好評の教科書。因果関係や共犯をはじめ、注目の最新判例も踏まえ、初版よりも更に深く、わかりやすく全面改訂。
■3,800円＋税

最新｜日本経済入門［第5版］
小峰隆夫・村田啓子［著］
日本経済の現状と課題を最新のデータと問題意識にもとづいて解説するテキスト。2012年4月以降をフォローした4年振りの改訂。■2,500円＋税

一流の狂気
心の病がリーダーを強くする
ナシア・ガミー［著］
山岸 洋・村井俊哉［訳］
リンカン、ケネディ、チャーチル、ガンディー……危機の時代の指導者達は精神に病を抱えていた。精神疾患がリーダーシップにもたらす恩恵とは。■2,600円＋税

ベイズ法の基礎と応用
条件付き分布による統計モデリングとMCMC法を用いたデータ解析
間瀬 茂［著］■3,500円＋税
ベイズ法を概観し、関連する話題を紹介。条件付き確率分布による統計モデリング、マルコフ連鎖モンテカルロ法とその応用を解説。

数学ガイダンス2016
数学セミナー増刊
■1,600円＋税
数学セミナー編集部［編］
大学で初めて数学を学ぶ学生、理系に進もうと考えている高校生に、大学数学のすべてを伝える。ノートやレポートの書き方もわかる。

日本評論社
〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL:03-3987-8621 http://www.nippyo.co.jp/

命の形 形の命

Lives of Form | Form of Lives / No. 07

会議色という言葉があるそうだ
会議によって物事を決めると
結果は大旨灰色になることをいう
黄の意見・赤の意見・青の意見、それに発言の
無かった白を加えて混ぜ合わせれば
灰色になるそのことから会議とは、
どれだけ少数の優れた意見を尊重し
鮮やかに発色させるかにある

色彩は主に感情を表すが
記号として使われることもある
信号・増減・安全・危険など
また企業色として記号化される

赤は血液

心が騒ぐ

闘牛士と闘う牛は
赤を認識できない
血が騒ぐのは人間

ナヴァホ族は
青と緑は同じ色
黒は2色に分ける

虹は民族によって
3色・6色・7色の違いがある
美しい配色と感ずるのは
それぞれの民族によって異なる
それが民族の伝統色

RED

セザンヌは緑色に敏感だったと言われている
数百色の緑色を見分けることができた

GREEN

YELLOW

色彩は周囲の環境に影響される
私たちは、その現象を見ている
美しい配色は音楽の和音に通ずる
音の周波の同調で和音が生まれるのであれば
色彩も光の周波の同調によって
美しい配色が生まれるのであろうか
光の周期律から和色が存在するのだろうか

Logical thinking

論理的な思考は形態から

Sensibility thinking

感覚的思考は色彩から

BLACK

配色にも黄金比が存在する。

和音に非ずこれを和色と名付ける

ロシア・アヴァンギャルドの赤と黒は形式化された記号

色彩感覚の領域は人それぞれ
皆違っているらしい
その人と色彩を見分ける領域に
差があるからだ
同じ緑でも君と私の緑は
違って見えている

形態や色彩感覚は
人が自然から教えられる
全ての単色は美しい
彩られたものは能弁である
色彩には形は存在しない

BLUE

カラーテレビが普及し始めた頃
カラフルな色彩が生活環境の中に
存在していなかったので
やけに地味な色に調整していた
現在、皆が見ている色調だと
派手すぎて受け入れられなかった

中垣信夫｜グラフィックデザイナー
Nobuo NAKAGAKI｜GraphicDesigner

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

大学出版部協会第七回理事会が開かれる

一月二九日、駒場の東京大学出版会で第七回理事会が開催された。国際文化会館（港区）で開かれた年末例会の会計報告と、今年九月の東京国際ブックフェアに合わせて開催される日韓合同セミナーの概略などが話し合われた。他に、第七五回アジア学会の出展、今年度開催予定の市民シンポジウム、電子出版アンケート調査の途中経過などが報告された。

×月〇日

テレビのことを韓国ではばかボックスと言ったらしいが、日本でも似たような表現の揶揄はあったのである。一概に決めつけるのもどうかと思うが、潜在力をそなえたこのメディアを貶めている一部制作者の程度もいかがかと思う。以前BSのワールドニュースで、ロシアのテレビ局が福島原発の地元へ取材に行って、日本のレポーターにはぜったいできない辛辣なインタビューをぶつけているロシアのテレビ番組を見た。ここにはテレビというメディアがもつ類まれなハイブリッド性が内在化していると考えられる。電波＝映像から、映像デジタル＝HDD＝編集という新たな「書き換え」によって、映像の文字化（映像書籍）とも言うべき、メディアのメタ化現象が進んでいる。そういうこともあって番組表を渉猟していたら、「すずらん本屋堂　町の小さな本屋さん　沖縄編」を見つけた。那覇市牧志中央通りにある「市場の古本屋ウララ」店主宇田智子さんの日常を取材・インタビューしたものである。宇田さんは地元出版社が作った、いわゆる「沖縄県産本」に魅せられて、それを売ることにほぼ徹していらっしゃるのである。じつは一昨年、編集部会の春季研修会が沖縄で開かれたとき、宇田さんや地元出版社を招いて討論しており、それに関連した報告が本誌一〇四号に掲載されている。そのときに浮上した論点の一つが、「地産地消（地元出版社が作った本を、地元の人たちに売る）」をどう考えるかであった。

地元出版社では、沖縄にとって県産本は実用書のようなものだから、これは文化の「地産地消」であると言い、一方、大学出版部側からは学術書は「普遍」をめざすべきだとの意見が出た。両者の出版の立場を考えればここに大きな齟齬があるようには思えないが、同じ学術書でも当方のように発行数が少なく売上も下のほうの数百である場合には、普遍というには甚だ心許なく、さしずめこれは「学産学消」とでも言うべきか。

北海道大学出版会

▼五十嵐博著『**北海道外来植物便覧―2015年版**』（B5判・二〇二頁・四八〇〇円）北海道に記録された帰化植物七一〇種（分類群）を掲載。特色ある植物六五種を一一頁のカラープレートに収録。三一三種について分布図を添付。

▼手代木求著『**世界のタテハチョウ図鑑―卵・幼虫・蛹・成虫・食草**』（A4判・五六八頁・三二〇〇〇円）蝶大好き人からタテハチョウ・マニアまでを満足させる基本図鑑。世界の全二二五属のタテハチョウを六八六種収録。

▼村井貴史著『**バッタ・コオロギ・キリギリス 鳴き声図鑑―日本の虫しぐれ**』（A5判・二〇八頁・四六〇〇円）一二一種の鳴き声をCD二枚に収録。北海道から与那国島まで、全国の代表的な虫しぐれを、地域、時期、環境を考慮してまとめた。虫の音を楽しむ「癒し図鑑」。

▼梅沢俊著『**北海道のシダ入門図鑑**』（B5判・一四八頁・三四〇〇円）北海道に見られるシダ一三〇種を豊富な写真で紹介した初の本格的図鑑。「絵合わせ」で種名にたどりつけるように工夫している。

弘前大学出版会

▼和氣太司著『**インドネシアの私立大学―発展の仕組みと特徴**』（A5判・一六六頁・三七五〇円）太平洋に浮かぶエメラルドの首飾りと讃えられる世界最大の島嶼国家インドネシア。その人口は世界第四位の二億五千万に及ぶ。教育の普及も進み、現在四千近い大学があるが、その九六％を私学が占める。ジャカルタ特別州の私立大学とその経営主体である設置者に注目し、社会の教育ニーズに迅速に対応し拡大を遂げた私立大学の発展の仕組みと特徴を実証的に浮彫りにする。

▼清剛治著『**Educational System Innovation for Regional Economic and Social Development—Revitalization in Lowell, Massachusetts**』（B5変型判・一五四頁・五六〇〇円）地域社会開発への一翼を担う地域大学の人材育成機能に光を当て、衰退した産業地域の再生に係る方法論を提示する。産業盛衰の歴史的経験、地域イノベーションシステムの比較、センター・オブ・リージョンとしての大学の役割をめぐる緻密な論証は、日本の地方創生への大いなる示唆となる。（全編英文）

東北大学出版会

▼有松唯著『**帝国の基層―西アジア領域国家形成過程の人類集団**』（A5判・三八六頁・四五〇〇円）国家はなぜ、どのように人類社会のしくみとなったのか。文化的背景、生活様式、言語、信仰といった倫理規範と象徴的位相（＝イデオロギー）が集団として機能するとき、集団や社会はどのようなかたちを求めていくのか。「帝国」と称される領域国家について、アケメネス朝ペルシャを事例として、人類集団としての特性化と人類の進化過程への位置付けを目指す。広い視野と深い思考から、集団化原理のシステムの普遍化の要諦を探り、西アジアの辺境で一〇〇〇年をかけてかたちづくられた社会の「基層」を浮き彫りにする。

▼入間田宣夫・仲野義文・荒武賢一朗著『**東北アジア学術読本5　世界遺産を学ぶ―日本の文化遺産から**』（四六判・九六頁・二〇〇〇円）世界遺産はなぜ重要で、登録されることにどんな意義があるのだろうか。「平泉」「石見銀山」「日光」の三つの国内文化遺産を例に、歴史文化と観光商業が共存する世界遺産の表裏を多角的に検証する。

流通経済大学出版会

▼陳蕭蕭著『**中国女子労働者の階級と消費空間**』（A５判・二四二頁・三三〇〇円）本書は、中国の新興工業都市・大連開発区における女子労働者の、消費、社会階級、空間の実証研究を通して、現代中国の消費社会化とその特徴を明らかにするものである。

著者が体験した社会主義計画経済から社会主義市場経済への変化に見出した問題意識を起点として、消費社会化や社会階級的・記号的消費空間と「第三空間」の先行研究整理、六十年を遡っての『人民日報』と地方紙『大連晩報』の消費に関する記事分析、「ＯＬ階級」と「女工階級」への地域移動を含めた詳細なインタビュー調査、消費の場としての商業施設の比較などによって、「幸福な消費空間」を享受する者とそこから排除される者の格差のある現実を浮き彫りにし、中国社会の矛盾に切り込んでいく。

聖学院大学出版会

▼窪寺俊之編著『**スピリチュアルケアの心―いのちを育む力・委ねる力**』〈スピリチュアルケアを学ぶ６〉（A５判・二五八頁・二三〇〇円）第Ⅰ部には、ヴォーリズ記念病院ホスピス長の細井順氏による「いのちを育むホスピスケア―死にゆく人に生かされて」、栄光病院理事長・名誉ホスピス長の下稲葉康之氏による「死に対峙している魂の苦悩にどのように応えるか―ホスピスの現場から」、埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科教授大西秀樹氏による「がん医療の現場から見た心の問題」の三講演を、第Ⅱ部には、ケア実践者のアイデンティティとビジョンに関わる窪寺俊之氏の「スピリチュアルケアと信力の一考察」、伊藤高章氏の「スピリチュアルケアと〈他者論〉」の二論文を所収。ホスピスケアにおいてケアする者とされる者、両者を支える力について学ぶ一冊。

聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・川並珠緒・関口明子・羽生和夫著『**幼児理解と一人ひとりに応じた指導**』（B５判・一一六頁・一五〇〇円）幼児理解の意義から指導計画、実際の指導法、指導要録等の書き方に至るまで、幼児理解と指導についてひととおり網羅できる一冊。

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『**改訂版 一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援**』（A５判・二一八頁・一五二八円）特別支援教育について子どもの理解と指導・支援に必要な基礎知識を初学者にも分かりやすく解説。

麗澤大学出版会

▼宮下和大著『**朱熹修養論の研究**』（A5判・二五六頁・二八〇〇円）中国南宋の朱熹（一一三〇―一二〇〇）は、誰もが聖人になりうるとし、聖人へ到達するための修養論の完成に力をいれた。東アジアの広域に伝播した「朱子学」の基点に位置する朱熹その人の思想を、修養の実効性（効果）という新たな視点から解明する。

▼張榮發述、陳俱任インタビュー・文、宮下和大・邱瑋琪訳『**本心―張榮發の本音と真心**』（A5判変型・二三二頁＋口絵八頁・一二〇〇円）エバーグリーン・グループ総裁・張榮發は幾多の困難を乗り越え、道を切り拓いてきた。彼の優しさと自信、そして厳しさは人間と物事に対する真心と愛情に支えられている。彼の飾らない語りと人柄に読者は魅せられるだろう。

慶應義塾大学出版会

▼ハワード・S・ベッカー著／後藤将之訳『**アート・ワールド**』（A5判・四六四頁・四五〇〇円）アートはいつ、どのように、誰によって「アート」になるのか？　誰もがアーティストになりうる時代の創造のプロセスを鮮やかに解明し、全包括的な「アート・ワールド」の理論を提示する。アメリカを代表する社会学者ベッカーの歴史的傑作。

▼池野絢子『**アルテ・ポーヴェラ―戦後イタリアにおける芸術・生・政治**』（A5判・三六八頁・五四〇〇円）一九六〇年代末にイタリアで興った前衛芸術運動「アルテ・ポーヴェラ」（貧しい芸術）を総合的に論じる本邦初の研究書。この運動を美術史上の転換期として捉えなおし、今日的意義を問い直す力作。

▼高橋義彦『**カール・クラウスと危機のオーストリア**』（四六判・三三六頁・三六〇〇円）一九世紀末からファシズム期の都市ウィーンを生きた反骨の言論人クラウス。個人雑誌を舞台に、第一次世界大戦への批判、同時代のフロイトや建築家ロースとの関係、ナチス・ドイツをはじめとした時代批判の根底をさぐる。

専修大学出版局

▼矢崎慶太郎著『**抑圧と余暇のはざまで―芸術社会学の視座と後期東ドイツ文学**』（A5判・二二八頁・二六〇〇円）芸術を社会学的に分析すると、その機能や多様性が見えてくる。東ドイツでは芸術が社会から自律していき、意図や内容の不明な作品が制作されるようになった。労働社会下の芸術家たちの要求運動や精神的抑圧等を考察する。

▼李羅炅著『**雇用形態を理由とする労働条件格差是正の法理―日韓比較**』（A5判・三五二頁・三八〇〇円）日本と韓国の非正規雇用労働者の現状と、それに関係する法律について検証し、差別的処遇の禁止に関する法制を検討する。非正規雇用の労働条件規制が強化され、労働条件格差の是正のための法規制とはどういうことかを問い直す。

▼専修大学今村法律研究室編『**神兵隊事件別巻四**』（A5判・四三二頁・五六〇〇円）昭和八年に殺人罪等で起訴され、東京地裁で予審に付された本事件の「被告人訊問調書」である。予審終結意見書において内乱予備罪に相当するとの判断が示された根拠となった重要資料である。

大正大学出版会

▼大正大学地域構想研究所編『**地域人**』（Ａ４判・平均一四四頁・八一五円・毎月十日発売）「現代社会の最優先課題は、地域創生にある」をテーマに、地域の実態理解と再生の方法論をさまざまな視覚から紹介する地域情報満載の総合情報誌。地域特集では、現地取材をもとに、物事を経済的視点だけから見るのではなく、多様な文化、歴史、暮らしに至るまでを掘り起こすことを目指している。一方で、地域創生とは何かを豪華連載人による、人口、産業、食文化、リノベーション、ふるさとと信仰など、社会から心の問題まで幅広い提言を毎号掲載する。第六号　地域特集―岩手県／達増拓哉岩手県知事インタビュー、「黄金の國、いわて。」の〝営業本部長〟に聞く売り込み戦略、〝黄金の國〟を輝かせるいわて人、若者たちの力で推し進める岩手の再生と発展ほか。

玉川大学出版部

▼柿﨑博孝・宇野慶著『**博物館教育論**』（Ａ５判・一九二頁・二四〇〇円）博物館での教育活動の基盤となる理論や、実践に関する知識と方法を網羅的に解説。現在の博物館が抱える問題のほか、利用者がよりよい博物館体験を得られる方法などを検討する。学芸員養成課程で必修化された「博物館教育論」に沿った内容。

▼石井恭子編著『**教科力シリーズ　小学校理科**』（Ａ５判・二一二頁・二四〇〇円）小学校の教科実践力の基礎を育む、自学自習テキストシリーズ。物理、化学、生物、地学の各分野について、特別な器具がなくてもできる実験や、身の回りの自然現象への観察方法を多く取りあげ、理科の概念理解を促す。学習指導要領・平成二〇年改訂に対応。

▼寺本潔編著『**教科力シリーズ　小学校生活**』（Ａ５判・一八四頁・二四〇〇円）教員の力量形成において重要な、各教科の内容構成の理解を目的とする。具体的な場面を想定しながら、体験や活動を軸に、気付きを生み出す生活科の全体像を捉える。各単元の計画目標、実施方法、評価の観点なども解説する。

中央大学出版部

▼椎橋隆幸編著『**裁判員裁判に関する日独比較法の検討**』（Ａ５判・二四二頁・二九〇〇円）我が国の裁判員裁判制度の重要論点についてドイツの法制度との比較法的視点から分析・検証を行う。

▼中央大学経済研究所編『**日本経済の再生と新たな国際関係**』（Ａ５判・四四八頁・五三〇〇円）失われた二〇年を経験した日本経済再生のための指針を提示。経済研究所創立五〇周年記念号。

▼中央大学人文科学研究所編『**フランス民話集Ⅴ**』（四六判・九〇四頁・六三〇〇円）ロワール川流域など九地方の民話を集録。ジョルジュ・サンドらが編纂。

▼安野智子編著『**民意と社会**』（Ａ５判・一四四頁・一六〇〇円）民意をどのように測り、解釈すべきか。世論調査の選択肢や選挙制度、地域の文脈が民意に及ぼす影響を論じる。

▼萩原金美著『**検証・司法制度改革Ⅱ―裁判員裁判・関連して死刑存廃論を中心に**』（四六判・三九〇頁・三〇〇〇円）裁判員裁判とそこでの重要課題である死刑の存廃問題について論ずる。裁判員の副読本。

東京大学出版会

▼高山大毅著『**近世日本の「礼楽」と「修辞」―荻生徂徠以後の「接人」の制度構想**』（A5判・四一六頁・六四〇〇円）荻生徂徠に影響を受けた思想家によって構想された美しく「人に接（まじ）」わる制度とその実践を鋭利に分析。【第5回東京大学南原繁記念出版賞受賞作】

▼平山昇著『**初詣の社会史―鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム**』（A5判・三二八頁・六四〇〇円）毎年多く人が訪れる初詣。近世の恵方詣を淵源に、「国民的行事」として定着したその歴史を探る。

▼鈴木宏昭著『**教養としての認知科学**』（四六判・二九六頁・二七〇〇円）知性の意外なまでの脆さ・儚さと、それを補って余りある環境との相互作用を、記憶・思考を中心に身近なテーマからわかりやすく紹介。【円城塔氏推薦】

▼東京大学教養学部編『**高校生のための東大授業ライブ　学問からの挑戦**』（A5判・二五六頁・一八〇〇円）公開講座「高校生のための金曜特別講座」から一五の授業を「研究」をキーワードに書籍化。新しい知識を生み出す最先端の研究機関としての大学の姿を伝える。

東京電機大学出版局

▼鈴木美朗志著『**XBeeによるArduino無線ロボット工作**』（B5判・一九二頁・二七〇〇円）XBee（エックスビー）とは、無線通信機能を持った小型モジュールである。Bluetoothよりも省エネ、安価であり、初心者でも手軽に扱うことができる。本書では、簡単マイコンのArduino（アルドゥイーノ）とXBeeを使って、ラジコンのようにワイヤレスで操作できるロボットを製作。走破性抜群のアームクローラや虫型ロボット、RCサーボを使用した三つ脚ロボット、空き缶搬送ロボットなど、実用的な製作事例を多数紹介。XBeeの概要や使い方、本書で扱うソフトウェアのダウンロードや使用方法についても詳解。無線制御が初めてでも学びやすく解説している。この一冊で、ワイヤレスロボット工作に挑戦できる入門書である。

法政大学出版局

▼西城戸誠＋宮内泰介＋黒田暁編『**震災と地域再生―石巻市北上町に生きる人びと**』（四六判・三七八頁・三〇〇〇円）現地の人びとの生業や協働、高台移転についての現状分析・問題提起をまとめた共同研究。コミュニティの未来をさぐる。

▼R・ロス／平田雅博訳『**洋服を着る近代―帝国の思惑と民族の選択**』（四六判・三二六頁・三六〇〇円）衣服の歴史をたどり、多様だった世界の人々の服装がどのように画一化されていったのかを考察する。なぜ世界中の男性はみなスーツを着るようになったのか。

▼板橋勇仁『**底無き意志の系譜―ショーペンハウアーと意志の否定の思想**』（A5判・二五八頁・四二〇〇円）ベーメ、シェリング、ヘーゲル、ニーチェ、西田幾多郎との哲学史的な比較検討を通じ、この世界を「平安」「浄福」とともに生きる「底無き意志」の論理をたどる。

▼神山伸弘『**ヘーゲル国家学**』（A5判・四五八頁・六八〇〇円）主権者としての自覚と改革の志をもつ若者たちに捧げられた講義『法の哲学』が国家を考えぬくための学問として現代によみがえる。

武蔵野大学出版会

▼阿部和穂著『**危険ドラッグ大全**』（A5判・二五六頁・二五〇〇円）危険ドラッグはなぜ生まれたのか？　危険ドラッグは脳にどう作用するのか？　危険ドラッグはなぜやめられないのか…？　薬学部の教授である薬の専門家が、危険ドラッグのすべてを豊富な図版で解説する。

▼佐藤佳弘著『**インターネットと人権侵害**』（A5判・二〇八頁・二〇〇〇円）名誉毀損・侮辱・信用毀損・脅迫・さらし・ネットいじめ・児童ポルノ・ハラスメント・差別…。インターネット上での誹謗中傷は、誰が書き込んだのかわからないだけでなく、その削除も簡単にはできない。現在、ネットで起こっている人権侵害について、数多くの実例をもとにその対処方法を解説する。

武蔵野美術大学出版局

▼金子伸二・杉浦幸子編『**ミュゼオロジーの展開　経営論・資料論**』（A5判・三八四頁・二六〇〇円）ミュージアムをいかに機能させていくか。一七名のプロフェッショナルによる多角的な論考。

▼清水恒平著『**マルチメディアを考える**』（A5判・九六頁・一二〇〇円）エンドユーザーが発信者となり、ものづくりをする時代にあって、これからのデザイナーは何をなすべきか？

▼朴亨國監修『**東洋美術史**』（A5判・三七六頁・二四〇〇円）美術史は、造形作品でたどる人間の歴史である。広大なユーラシア大陸を舞台に織りなされた東洋の造形をたどる旅に出よう。

▼白石美雪編『**音楽論**』（A5判・三八四頁・二七〇〇円）人はなぜ歌い、踊り、奏でるのか。音楽文化、現代音楽、世界音楽の三つの視点から、人類とともにある音楽的事象を読み解き、思考する。

▼高橋陽一・伊東毅編『**新しい教育相談論**』（A5判・二二四頁・一九〇〇円）心理学と教育実践を踏まえた学校教員のための教育相談論。いじめ、不登校から多文化共生、宗教まで教室の課題に対応。

明星大学出版部

▼明星大学明星教育センター編著『**自立と体験1**』ポートフォリオ（A4判・九六頁・一六〇〇円）

▼明星大学教職センター編『**教員を目指す君たちに受けさせたい面接試験対策講座―教員になる覚悟を持つ**』（A5判・四月刊行予定）

▼樋口修資・吉冨芳正・林一夫著『**教育の最新事情**』（A4判・四月刊行予定）

▼明星大学教職センター編『**教員を目指す君たちに受けさせたい論作文講座―教育の見方・考え方が変わる**』（A5判・一六〇頁・一六〇〇円）

▼樋口修資著『**最新　教育の行政・制度と学校の管理運営**』（A5判・五一〇頁・二九〇〇円）

▼樋口修資著『**最新　教育法の基礎**』（A5判・四六四頁・二六〇〇円）

▼樋口修資著『**教育委員会制度変容過程の政治力学―戦後初期教育委員会制度史の研究**』（A5判上製・三〇〇頁・三二〇〇円）

▼阪井恵・有本真紀・木暮朋佳・中里南子著『**五線譜の約束**』（B5判・一二〇頁・一三〇〇円）

関東学院大学出版会

▼非営利法人会計研究会編『**非営利組織体の会計・業績および税務―理論・実務・制度の見地から**』（A5判・二七六頁・二六〇〇円）非営利組織においては、経営管理・外部報告いずれの目的にも役立つべき会計がその役割を果し得ていない。

縦割り行政を背景に主務官庁主導で整備・運用されてきた会計制度が混乱の原因である。会計が非営利組織の活動を支援するものとなるためには、シンプルで普遍的な理論・技術・制度構築が必要である。本書はその手掛かりを得ることを目的とし、非営利組織会計基準の整備過程・現状そして課題を整理している。

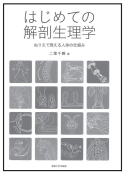
▼兒玉幹夫著『**福祉の理念と社会学**』（A5判・二二四頁・二六〇〇円）福祉社会の理念を、友愛・連帯・平等・公正など欧米の社会学思想の発展のうちに求め、それに先導され、それを消化しながら日本の社会学が進展してきた過程を学説史的にたどった福祉社会学思想史。特に従来あまり知られなかった明治・大正・昭和の福祉社会学の先駆者たちを論じた諸章がユニークである。

東海大学出版部

▼酒井治孝著『**ネパールに学校をつくる―協力隊OBの教育支援35年**』（A5変型判・一五四頁・一六〇〇円）海外青年協力隊で一九八〇年にネパールの国立大学で教鞭をとっていらい、現在まで続く、資金集めから土地の買取、水道やトイレの設備、校舎建築工事、教員確保などの「学校つくり」の支援を綴る。

▼二葉千鶴著『**はじめての解剖生理学―ぬりえで覚える人体の仕組み**』（B5判・一二〇頁・二三〇〇円）医療看護系大学での解剖学の授業内容をテキスト化。看護師国家試験合格レベルの知識の補足に。

▼佐藤寛之著『**琉球列島のススメ**』（B6判・三七八頁・二五〇〇円）フィールドの生物学シリーズ⑯両生類を専門とする研究者が、一見支離滅裂に見える自然観をとおして、フィールドにおけるさまざまな経験や脱線の経緯を紹介しつつ、海陸を問わず琉球列島の多様な生き物やその生態、現象など、沖縄の魅力を紹介する。



名古屋大学出版会

▼稲賀繁美著『**接触造形論―触れあう魂、紡がれる形**』（A5判・四八四頁・五四〇〇円）触知的感性の藝術・美学にむけて――。彫刻・陶藝から建築まで、異質なるものが「接触」するときに何が生まれるのか。

▼小川眞里子著『**病原菌と国家―ヴィクトリア時代の衛生・科学・政治**』（A5判・四八八頁・六三〇〇円）再帰する感染症の中で――。国家医学の誕生と帝国医学への変容を、実験医学の発展とともに描く。医学と社会の関係を問う力作。

▼小野沢透著『**幻の同盟―冷戦初期アメリカの中東政策**』上・下（菊判・六五〇頁／六〇八頁・各六〇〇〇円）一九五〇年代初頭、西側世界の同盟相手として中東は再発見された。膨大な一次史料を読み解き、知られざる地域構想の運命を鮮やかに描き出した一大叙事詩。

▼安達祐子著『**現代ロシア経済―資源・国家・企業統治**』（A5判・四二四頁・五四〇〇円）独自のガバナンスの重要性に着目。移行経済におけるインフォーマルな国家・企業間関係の決定的意味を捉え、ロシア型資本主義の特質に迫る。

三重大学出版会

▼濱森太郎著『**遺言実行―芭蕉作『笈の小文』の場合**』（B5判・二二四頁・一八〇〇円）松尾芭蕉から遺稿の「引き直し」を依頼された各務支考がいかに書き直したか、なぜ書き直したか、その動機を解明する。

■1　表現したいことがある／2　作者芭蕉、従者杜国／3　『笈の小文』の表現の瑕疵について／4　『笈の小文』吉野巡礼の成立―唱和する杜国―／5　『笈の小文』の記名と折端・折立揃え／6　『笈の小文』―須磨明石紀行の成立―／7　『笈の小文』―和歌浦句稿の追加―／8　書き取り、清書、副本作成／9　大礒本・雲英本から乙州本へ／10　「明石夜泊」虚構と作意／11　風羅坊の騒人性―見えない物を見る人／12　処女紀行文の最終校正／13　続処女紀行文の最終校正／14　『おくのほそ道』の仮想現実／15　各務支考の模写と偽筆／16　続各務支考の模写と偽筆／17　各務支考補正の「庚午紀行」／18　芭蕉の立ち位置が動いた／19　結び

■**第14回日本修士論文賞募集中**

京都大学学術出版会

▼石川真由美編『**世界大学ランキングと知の序列化―大学評価と国際競争を問う**』（A5判・三六〇頁・三八〇〇円）大学評価の現場や、専門領域の第一線をリードする世界の専門家が会して、世界大学ランキングの実態とそのもたらす混乱の意味を冷静に分析し、特性を活かした大学と学問の発展のために、新しい大学・研究評価のあり方を提案する。

▼スティーブン・トレンソン著『**祈雨・宝珠・龍―中世真言密教の深層**』（A5判・四九五頁・六〇〇〇円）中世真言密教における舎利・宝珠信仰の本質とは何か。祈雨法・請雨経法の歴史と信仰をひもとく中から浮かび上がる、龍神信仰との結びつきを詳らかにし、『御遺告』宝珠譚から三尊宝珠信仰にいたる真言密教の展開過程を理解する鍵を提供する。

▼江口和洋編『**鳥の行動生態学**』（A5判・三二〇頁・三二〇〇円）。いろんな姿形で多様な暮らしをしている鳥たちは、どのように環境に適応して生きているのか。観察はもちろん、遺伝子解析やバイオロギングなど最新の技法を駆使して、鳥の行動をめぐる「なぜ？」に迫る。

大阪経済法科大学出版部

今回はアジア研究所研究叢書の既刊書の中から二点を紹介します。

▼戴逸、楊東梁他著／華立監訳／岩田誠一、高蘭美共訳『**日清戦争と東アジアの政治**』（A5判・四六〇頁・四八〇〇円）日清戦争一〇〇周年を期して刊行された『甲午戦争与東亜政治』（中国社会科学出版社）の翻訳書。中国が西洋文明を取り入れるために実行した洋務運動、日本の台湾占領時の住民の抵抗、朝鮮半島を巡る日本の策謀と清朝政府の対抗など日本であまり書かれていない中国、日本、朝鮮三国間の近代の歴史がきわめて要領よくまとめられ、周到な分析と冷静な判断による客観的な叙述は、中国側の歴史観を知る格好の書。〈二〇〇三年刊〉

■白榮勛著『**東アジア政治・外交史研究―「間島協約」と裁判管轄権**』（A5判・四六〇頁・四二〇〇円）一九〇九年に日本が清国と締結した「間島協約」と間島地方の朝鮮民族をめぐる日中両政府の交渉過程を検討することによって、当時の日中両国の政策判断と居住朝鮮人の動向を明らかにしようとしたものである。〈二〇〇五年刊〉

大阪大学出版会

▼渡邉克昭著『**楽園に死す―アメリカ的想像力と〈死〉のアポリア**』（A5判・五四六頁・七一〇〇円）現代アメリカ文学を代表するヘミングウェイ、ベロー、バース、パワーズ、エリクソン、デリーロに焦点を絞り、デリダやドゥルーズを援用して分析する。▼水野かほる・津田守編著『**裁判員裁判時代の法廷通訳人**』（A5判・三六〇頁・六〇〇〇円）制度も運用も様々な困難を抱える法廷通訳人の現状と課題を明確化し、より迅速かつ適正な裁判のあり方を追究する。▼大久保規子編著『**緑の交通政策と市民参加―新たな交通価値の実現に向けて**』（A5判・二七四頁・五二〇〇円）交通政策基本法を単なる理念で終わらせない。誰もが移動に困ることのない地域社会を創る参加の協働の実現と気づきから根づきへ。▼小島祥美著『**外国人の就学と不就学 社会で「見えない」子どもたち**』（A5判・一七八頁・二九〇〇円）日本の公教育において未だ就学義務の対象とされていない外国人の子ども達の実態とその対応を著者の調査が初めて明らかにした。

関西大学出版部

▼関西大学 戦略的研究基盤 団地再編プロジェクト編『**ストック活用型団地再編への展望（前編／後編）**』（B5判・三五〇〇円／三〇〇〇円）ストックを活かしつつ、コミュニティ再生と持続的な集住環境の実現、仕組みや制度の再編と豊かな生活の風景の創出を目指して、どこから如何に取り組むのか。地域と生きる団地再編への研究活動報告（前編）と、再編の方向性を探るテキスト（後編）。▼松浦章編著『**日本台湾統治時代のジャンク型帆船資料**』（A4判・三八〇〇円）一八九五年以降、約半世紀にわたって、日本が台湾を統治すると、ジャンク型帆船にも船籍の登録が必要となり、多くの台湾船舶が船籍登録している。その記録の一部が、旧台湾総督府の公文書類の中に残された。本書はその一部について考察を加え、船籍登録書も影印し紹介する。▼劉雄峰著／二階堂善弘監訳『**神話から神化へ**』（A5判・二九〇〇円）中国の明清時代には、宝巻を信仰の中心とした民間宗教が次々に起こった。これまで歴史的な研究が多かった民間宗教を、その信仰理論面から考察したものが本書である。

関西学院大学出版会

▼三原博光著『**障害者家族の理解と障害者就労支援―県立広島大学での実践的試み**』（A5判・一九六頁・二〇〇〇円）▼關谷武司編著『**世界へ挑む君たちへ―実践型グローバル人材教育論**』（A5判・二三四頁・二〇〇〇円）▼ウォルター・R・ランバス著／堀忠訳／山内一郎・神田健次監修『**医療宣教―二重の任務**』（A5判・二九〇頁・二八〇〇円）▼福井幸男著『**アメリカ大リーグにおけるイノベーションの系譜**』（A5判・二二八頁・三〇〇〇円）▼リスクデザイン研究センター・NPO法人リスクデザイン研究所共編　KGりぶれっと39『**復興と居住地移動**』（A5判・一一二頁・九〇〇円）▼松岡克尚著『**ソーシャルワークにおけるネットワーク概念とネットワーク・アプローチ**』（A5判・三六四頁・四〇〇〇円）▼大迫正弘・砂原美佳・關谷武司著『**プロジェクトとしての論文執筆―修士論文・博士論文の執筆計画**』（A5判・一八四頁・一九〇〇円）

広島大学出版会

▼松本陽正著『**「異邦人」研究**』（A5判・二七六頁・二二〇〇円）本書はアルベール・カミュ『異邦人』の研究書。先行する習作との関係や形成過程研究、緻密なテキスト読解・分析による作品世界の提示、テマティックなアプローチ、比較文学的アプローチ等の多様な角度から『異邦人』を研究し、正確な読解を提出する。それとともに、『異邦人』の世界を総合的に描き出すことにより、一般読者に向けても小説の読み方の一例を示す。研究書としては刊行後七十年余を経て醸成された『異邦人』解釈の定説に修正を迫り、一般向けには小説を読み解くときのワクワク感を感じさせる一冊。

◆主要目次◆

『異邦人』への第一歩―「ルイ・ランジャール」／『幸福な死』と『異邦人』／『異邦人』の形成過程／『異邦人』の世界―構造と技法―／主人公ムルソー像／その他の作中人物たち―「小柄な機械人形」を中心にして―／『異邦人』のメインテーマ―不条理―／『異邦人』へのテマティックなアプローチ／『異邦人』への比較文学的アプローチ

九州大学出版会

▼田川玄・慶田勝彦・花渕馨也編『**アフリカの老人―老いの制度と力をめぐる民族誌**』（A5判・三〇〇〇円）老いることの価値と目標、誇りそして悲哀を描き出すフィールドワークの集成。▼藤井美男編・ブルゴーニュ公国史研究会著『**ブルゴーニュ国家の形成と変容―権力・制度・文化**』（A5判・六〇〇〇円）経済史、社会史、都市史、文化史など多様な観点からの分析。▼菊池繁夫・上利政彦編『**英語文学テクストの語学的研究法**』（A5判・四八〇〇円）文献学・言語学・文体論といった語学的見地から、英米文学作品をハイレベルで論じるための指針を示した手引書。▼甲斐雄一『**南宋の文人と出版文化―王十朋と陸游をめぐって**』（A5判・三六〇〇円）南宋時代に生きた対照的な二人の文人を中心に、出版業の隆盛と版本の普及を考察する。〈九州大学人文学叢書9〉▼山内昭人『**戦争と平和、そして革命の時代のインタナショナル**』（A5判・四二〇〇円）第一次大戦とロシア革命の時代に追求された国際社会主義の歴史的意義を実証的に解明。〈九州大学人文学叢書10〉

事務局便り

現在、大学出版部協会に加盟するのは、三〇出版部です。それに対して（正確な統計値は摑めていませんが）、全国の大学出版部の数は、七〇～八〇くらいあると推測されています。協会の理想は、全国にある大学出版部を糾合して、現在以上に多様性を包含し得る組織に成長することでありましょう。そこに近づく方途は何も大それた策を弄することではなく、各加盟出版部の日々の出版活動と、相互の信頼に尽きるのではないでしょうか。

最近になって、歴史のある早稲田大学出版部（一八八六年設立）の方が協会事務局を訪れました。同出版部は、二〇〇七年の大学創立一二五周年を契機に、経営・出版体制を刷新、新たな出版活動を推進しています。厳しい出版状況をともに切り拓いていく仲間として、また刺激を与えてくれる存在として、心からの歓迎の意を表明いたします。

大学出版部協会は、学術出版をめぐるあらゆる問題に対処しうるよう、開かれた学術団体でありたいと願っており、入会のための門は常に開けております。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

【50音順】2016年2月25日現在

㈱朝日新聞社	〒104-8011	東京都中央区築地5-3-2	TEL 03-5540-7749
亜細亜印刷㈱	〒380-0804	長野県長野市大字三輪荒屋1154	TEL 026-243-4858
㈱アベル社	〒162-0825	東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408	TEL 03-3235-1360
尼崎印刷㈱	〒661-0975	兵庫県尼崎市下坂部3-9-20	TEL 06-6494-1122
㈱ALE	〒103-0023	東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階	TEL 03-5652-8627
王子製紙㈱	〒104-0061	東京都中央区銀座4-7-5	TEL 03-3563-7072
岡本出版発送㈱	〒353-0001	埼玉県志木市上宗岡3-16-2	TEL 048-471-6291
カクタス・コミュニケーションズ㈱	〒100-0004	東京都千代田区大手町2-6-2 日本ビル10階	TEL 03-5542-1950
㈱加藤文明社印刷所	〒101-0061	東京都千代田区三崎町2-15-6 K-STAGE	TEL 03-3261-8281
城島印刷㈱	〒810-0012	福岡県福岡市中央区白金2-9-6	TEL 092-531-7102
㈱紀伊國屋書店	〒153-8504	東京都目黒区下目黒3-7-10	TEL 03-6910-0510
㈱クイックス	〒456-0004	愛知県名古屋市熱田区桜田町19-20 名古屋本部	TEL 052-871-9190
㈱粂川印刷	〒112-0012	東京都文京区大塚6-9-7	TEL 03-3943-9811
㈱クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021	東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F	TEL 03-3525-8001
港北出版印刷㈱	〒150-0002	東京都渋谷区渋谷2-7-7	TEL 03-5466-2201
三松堂印刷㈱	〒101-0065	東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階	TEL 03-6823-5360
三美印刷㈱	〒116-0013	東京都荒川区西日暮里5-9-8	TEL 03-3803-3131
三立工芸㈱	〒101-0061	東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F	TEL 03-3261-5171
三和印刷㈱	〒381-2226	長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1	TEL 026-285-2300
信濃印刷㈱	〒102-0072	東京都千代田区飯田橋4-1-11	TEL 03-3237-3601
㈱渋谷文泉閣	〒380-0804	長野県長野市三輪荒屋1196-7	TEL 026-244-7185
㈱眞興社	〒150-0033	東京都渋谷区猿楽町19-2	TEL 03-3462-1181
新日本印刷㈱	〒162-0801	東京都新宿区山吹町342	TEL 03-3269-3611
㈱精興社	〒101-0054	東京都千代田区神田錦町3-9	TEL 03-3293-3021
創栄図書印刷㈱	〒604-0812	京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766	TEL 075-255-2288
大同印刷㈱	〒849-0902	佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20	TEL 0952-71-8550
ダイニック㈱	〒105-0004	東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル	TEL 03-5402-1811
㈱太平印刷社	〒140-0002	東京都品川区東品川1-6-16	TEL 03-3474-2821
㈱太洋社	〒501-0431	岐阜県本巣郡北方町北方148-1	TEL 058-324-2111
寶紙業㈱	〒102-0072	東京都千代田区飯田橋3-7-14	TEL 03-3261-5335
㈱竹尾	〒101-0054	東京都千代田区神田錦町3-12-6	TEL 03-3292-3617
宗教法人天然寺	〒204-0021	東京都清瀬市元町1-4-5-711	TEL 0424-92-4359
㈱東京弘報社	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-34	TEL 03-3291-1771
㈱とうこう・あい	〒104-0061	東京都中央区銀座8-11-11	TEL 03-3571-6000
東光整版印刷㈱	〒135-0006	東京都江東区常磐2-12-15	TEL 03-3632-0801
㈱トーヨー企画	〒602-0923	京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7	TEL 075-411-8288
図書印刷㈱	〒114-0001	東京都北区東十条3-10-36	TEL 03-5843-9700
㈱日新広告社	〒101-0061	東京都千代田区三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F	TEL 03-3263-9431
㈱日本経済新聞社	〒100-8066	東京都千代田区大手町1-3-7	TEL 03-5255-2198
萩原印刷㈱	〒112-0004	東京都文京区後楽2-21-12	TEL 03-3811-4272
㈱博報堂	〒107-6322	東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F	TEL 03-6441-6711
藤原印刷㈱	〒101-0052	東京都千代田区神田小川町2-4-5	TEL 03-3291-0191
㈱平文社	〒170-0005	東京都豊島区南大塚2-35-7	TEL 03-3944-0301
㈱堀内印刷所	〒335-0034	埼玉県戸田市笹目3-11-5	TEL 048-422-0029
㈱毎日新聞社	〒100-8051	東京都千代田区一ツ橋1-1-1	TEL 03-3212-3340
誠製本㈱	〒174-0042	東京都板橋区東坂下1-19-5	TEL 03-3967-3952
㈱遊文舎	〒532-0012	大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31	TEL 06-6304-9325
㈱読売新聞東京本社	〒100-8055	東京都千代田区大手町1-7-1	TEL 03-3242-1111
㈱ライトコミュニケーション	〒101-0035	東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F	TEL 03-3251-7571
渡辺印刷㈱	〒152-0031	東京都目黒区中根2-7-1	TEL 03-3718-2161

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2014年6月刊】

2013年6月から4回にわたり開催された大学出版部協会創立50周年記念連続シンポジウム「新しい社会を拓く大学の力」の成果より、2点をブックレット化しました。　日本生命財団学術書出版助成図書

座小田豊　ざこたゆたか（東北大学大学院文学研究科教授）
田中克　たなかまさる（京都大学名誉教授）
川崎一朗　かわさきいちろう（京都大学名誉教授）

防災と復興の知　3・11以後を生きる

A5 判・80 頁／定価（本体 1,000 円＋税）ISBN978-4-13-003150-9

列島沿岸を巨大堤防で覆う？――これまで通りの高度技術をふりかざすだけで、はたして本当に強靭な社会をつくることができるのか。哲学・生態学・地震学による対話を通して、自然と社会を千年の単位で見直し、再生のための知のあり方を探る。

〈主要目次〉
第一章「ふるさと」の根源的な力と想像力の可能性（座小田豊）／第二章　森里海の連環から震災と防災を考える（田中克）／第三章　災害社会――本当に強い社会とは（川崎一朗）／終章「ふるさと」から「ふるさと」へ（座小田豊）

中村哲之　なかむらのりゆき（東洋学園大学人間科学部専任講師）
渡辺茂　わたなべしげる（慶應義塾大学名誉教授）
開一夫　ひらきかずお（東京大学大学院総合文化研究科教授）
藤田和生　ふじたかずお（京都大学大学院文学研究科教授）

心の多様性　脳は世界をいかに捉えているか

A5 判・80 頁／定価（本体 1,000 円＋税）ISBN978-4-13-003151-6

トリ、ヒト、それぞれが視る世界は同じものではない。赤ちゃんはいつごろから自分を自分と認識するのか。心の働きの多様性を比較認知科学・発達認知科学の視点からわかりやすく解き明かす。

〈主要目次〉
第一章　トリの「視る」世界――動物の錯視と心（中村哲之）／第二章　ヒト型脳とハト型脳（渡辺茂）／第三章　脳は世界をいかに捉えているか（開一夫）／第四章　討論――心の多様性と現代（藤田和生×中村哲之・渡辺茂・開一夫）／あとがき（藤田和生）

小さな民のグローバル学

甲斐田万智子／佐竹眞明／長津一史／犠谷則子【共編著】

富も権力もなく、地理的・社会的な「周縁」に置かれながらも伝統的な民衆生業と助け合いの文化で支え合い、たくましく生きる人々。"小さな民のグローバルなつながり"から、多文化共生の時代を生きるヒントを学ぶ。

定価2500円＋税

ポルトガル語圏世界への50のとびら

上智大学外国語学部ポルトガル語学科【編】

ポルトガル語を話す国や地域に関する50のテーマから、今、そして未来における"魅力"を語る。

定価2000円＋税

アジアにおけるイエズス会大学の役割

高祖敏明／サリ・アガスティン【共編】

アジアのイエズス会5大学の研究者らが、カトリック教育の歴史的・社会的意義と将来の展望を探った、上智国際シンポジウムの内容を報告。

定価2500円＋税

〈発行〉Sophia University Press 上智大学出版
http://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/publication/SUP
〈発売・注文〉〒136-8575東京都江東区新木場1-18-11
ぎょうせい TEL：0120-953-431 FAX：0120-953-495

既刊47点　世界に向けて「知」を発信

早稲田大学学術叢書

近代武道・合気道の形成
「合気」の技術と思想

工藤 龍太 著　合気道創始者・植芝盛平らによってつくられた「合気」概念の日本武道における独自性を究明。　本体5200円＋税

戦後日本の対外文化政策
1952年から72年における再編成の模索

牟 倫海 著　今日注目される日本の文化的影響力はどのようにして生まれたかを解明。本体5000円＋税

前漢国家構造の研究

楯身 智志 著　前漢における「爵制的秩序」の内部構造とその変化の背景を丹念に検討。本体7400円＋税

日中漢字文化をいかした漢字・語彙指導法
「覚える」から「考える」へ

李 軍 著　日中漢字文化の融合・発展過程で現れた要素をいかし、生徒の関心をひく漢字・語彙指導法を提案。　本体5000円＋税

早稲田大学出版部
〒169-0051　東京都新宿区西早稲田1-9-12
☎03-3203-1551　http://www.waseda-up.co.jp/

-筑波大学の知の発信-

筑波大学出版会

http://www.press.tsukuba.ac.jp/

DEA フレックス総合評価法
社会システム分析への適用

橋本 昭洋 著

A5判　2,900円＋税
ISBN978-4-904074-34-3

【4刷出来】松倉 公憲 著

山崩れ・地すべりの力学
地形プロセス学入門

A5判　2500円＋税
ISBN978-4-904074-07-7

【電子版発売】大河内 信弘 編

ダイナミック手術テキスト
―肝臓編―

次世代型3D CG手術シミュレーション・システム

発売：丸善出版株式会社　TEL:03-3512-3256
http://pub.maruzen.co.jp/　FAX:03-3512-3270

東京学芸大学出版会

デジタル時代のメディア・リテラシー教育
――中高生の日常とメディアと授業の融合

ルネ・ホップス 著　森本洋介・和田正人 監訳

TV番組やインターネットなどアメリカで起こっている事例をもとに、リテラシーをどう教育するか具体的に解説しています。

B5判　208頁　2000円＋税

「もじゃペー」に〈しつけ〉を学ぶ
――日常の「文明化」という悩みごと　山名淳 著

ドイツで 150 年以上にわたって愛されてきた絵本『もじゃもじゃペーター』。物語の変化から、近代化としつけの関係を読み解く。

四六判　192頁　1200円＋税

分子生物学者、小学校長になる!
――朝礼と学校だよりで伝えたかったこと

飯田秀利 著

身近な話題を用いながら、子どもたちに人間の本質や科学的に考えることの楽しさについて、わかりやすく語りかけています。

四六判　184頁　1200円＋税

GIP
[TEL] 042-329-7797　[FAX] 042-329-7798
[HP] http://www.u-gakugei.ac.jp~upress

表紙写真：フンボルト大学の教室

撮影：vlasta2 (CC BY 2.0)
URL: https://flic.kr/p/tHUsQ

※季刊『大学出版』は、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードいただけます

大学出版106号（2016年春）
2016年4月1日発行
頒価100円（〒共）

発行所：一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091　FAX 03-3511-2092
E-mail：mail@ajup-net.com
URL：http://www.ajup-net.com/

表紙デザイン：阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

■ 北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-60-1167　FAX 0297-60-1165

■ 聖学院大学出版会
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801　FAX 048-725-0324

■ 聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

■ 麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320　FAX 04-7173-3154

■ 慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

■ 専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-3918-7311　FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局
〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL 03-5280-3433　FAX 03-5280-3563

■ 法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

■ 関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906　FAX 045-785-9572

■ 東海大学出版部
〒259-1292 平塚市北金目4-1-1
TEL 0463-58-7820　FAX 0463-58-7833

■ 名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

■ 三重大学出版会
〒514-8507 津市栗真町屋町1577
三重大学総合研究棟Ⅱ 3階
TEL 059-232-1356　FAX 059-253-3095

■ 京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

■ 大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129　FAX 072-941-9979

■ 大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238　FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002　FAX 0798-53-9592

■ 広島大学出版会
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
TEL 082-424-6226　FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会
〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ305
TEL 092-833-9150　FAX 092-833-9160

■ 東京農業大学出版会（休会）
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2666　FAX 03-5477-2747